著：スズム
主犯：150P
イラスト：さいね／こみね
終焉ノ栞
シュウエンシオリ
弐
ニ
報復
-Re:vival-
MF文庫

終焉ノ栞
シュウエンシオリ
弐
ニ
報復
-Re:vival-

内緒anDシーク

影踏みゲンガー

背徳Byebコール

正夢モンキーハンド

終焉リヴァイヴァル

終シユウ焉エン ノ栞シオリ 弐ニ

報復-Re:vival-

スズム

口絵●さいね
本文イラスト●こみね
主犯●150P

Contents

「また夢を見た……」

『これもいつもと一緒か……』

コンテニューしますか？

YES／NO

在あり来きたりヒーローズ

　誰も居ないはずの校舎に足音が響いた。

　木造の床がギシギシと不快な音を立てる。

　外はもうすっかり暗くなっている。

　ポチャンと、どこかの蛇じゃ口ぐちから、水が滴したたり落ちる音が聞こえた。

　そして、風が窓をカタカタと揺らす。

　いつもと一緒。

　変わらない、何度も見た結末。

　Ｄデイー音ネはＢビー子コを殺した。

　その後にＤ音も死んだ。

　そしてＡエー弥ヤはＣシー太タを殺した。

　最後に、Ａ弥はここで自殺する。

　誰も残らない。

　また今回も、誰も残らない。

これで、今回のパターンも終わり。

　ゲームオーバー。

　あーあ、またやっちゃった。

　つまんないつまんないつまんないつまんない。

　Ｂ級のオチはもういいんだよ。

　ほら、さっさと終わりにしようぜ。

　何度やっても同じ。

　心のどこかであり得るはずの無いイレギュラーを願った。

　この使い古し、極々ありふれた、つまらないパラレルワールドに逃げた話の「結末」が。

　──そうして、『いつも通り』旧校舎の元音楽室の、ドアを開けた…………。

犯行声明

　物語は続き、閉じることのない幕は……。

　窓の外の曇り空と同調し、また不安を煽る。また夏も始まっていないこの季節。消えることの無いひとつの噂うわさ話ばなしがあった。

　詳しくは誰も知らない。いや、誰も知ってはいけなかった。

　ただ空っぽの本と猫の栞しおりを見つけても、決して触れてはいけないとだけ言われていた。

　──それが終シユウ焉エンノ栞シオリ。

終焉ゲームのルール

　ひとりの裏うら切ぎり者もの「キツネ」によってゲームは始まった。

　抜け出したければ以下の条件に注意をし、終焉を迎えよ。

　──さあ、楽しい終焉ゲームの始まり始まり。

・ゲームの終焉を迎えるには「キツネ」を殺せ。

・「キツネ」を見つけることが出来なければ、それ以外は死ぬ。

・「キツネ」を探しながら、こっくりさんのお願いに従え。

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・指示の遂行を放ほう棄きした場合にも死ぬ。

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られた場合には、知ったその者が死ぬ。

・このゲームは終焉を迎えるまで絶対に抜け出す事は出来ない。
……絶対に。

『ニュース速報です――』

CHAPTER 1

内緒anDシーク

制作者:D音

内緒ａｎＤシークI　□既視感テンプレートー

「……そういえば、他にもこんな噂うわさ、知ってる？」

　老朽化が進み、今ではほとんど使用されていない木造二階建ての旧校舎。

　その二階にある、元音楽室に、私達４人は集まっていた。

「最近知った話なんだけどね、『笑う自殺者』っていう都市伝説があるんだ」

　いつものようにどこからか聞いてきた噂話を披露しているのは、Ａエー弥ヤ。

　あまりセットなどはしていないようで、少し長めの髪は所ところ々どころが跳ねている。目の下にも隈くまがあり、お世せ辞じにも好青年とは言いがたい。

　卑ひ屈くつな笑みを浮かべたまま、Ａ弥が続ける。

「あるカメラマンが体験した話なんだけどね、その日、その人は綺き麗れいな景色を撮ろうと思って、山の中で撮影をしていたらしいんだ」

「うん」

「視界が開けると、ちょうど手前に崖がけが見えて、その人は崖の写真を撮ろうとカメラを構かまえたんだけど、レンズ越しに見てみると、あるものが目に入ったらしいんだよね」

「……あるもの？」

「……そう、崖の上には、人が居たんだ。白いワンピースを着た、若い女性がね。彼は嫌な予感がしたんだけど、ファインダーから目を離す事が出来なかった。そして、彼がシャッターを連続で切り続けている間に──」

「……まさか」

「──その女性が崖から飛び降りた」

「……！」

「彼はやばいものを撮ってしまったと思った。だって、彼女が崖から飛び降りて、視界から消えるまで、ずっとシャッターを切り続けていたんだから。でも、それだけじゃなかったんだ。彼が恐おそる恐るその写真を確認してみると、１枚だけ、なんだかおかしい写真が入ってたんだ」

「……お、おかしい……って？」

「……その写真を拡大してみると……」

「……」

「──確かに女性は、カメラ目線で笑ってたんだ」

「……ひっ!!」

「……まあ、噂うわさ話ばなしだけどね」

　卑ひ屈くつな笑顔をより一いつ層そう歪ゆがませて、Ａエー弥ヤが言う。

「ははっ、また今日はずいぶんと怖い話だね」

　先ほどまでの怖い話など無かったかのように笑顔でＡ弥に話しか

けるのはＣシー太タ。色しき素そが薄くやわらかそうな猫毛に、人の良さそうな垂たれ目めをしていて、一般的にはイケメンと言われるような容姿だ。

「そうかな？　とっても面白い話だと思うんだけどね」

「あ、あんた……相変わらずの悪あく趣しゅ味みね……」

　可愛かわいらしい悲鳴を上げた後、ようやく口を開いたのはＢビー子コ。綺き麗れいに手入れされたショートカットの髪も色素が薄く、その下から覗のぞく整った目鼻立ちは学校でも間違いなくトップクラスに入るであろう美少女だ。普段は清せい楚そでおとなしくて、誰にでも人ひと当あたりがいいのだが、この教室の中ではその眉び目もく秀しゅう麗れいな優等生という仮面が少しだけ緩ゆるむらしく、普段見せないような表情で悪態をつく。

　私はその表情が、とても好きだった。

「……Ｂ子ちゃんの二面性も、相当悪趣味だと思いますよ？」

　私はおどけた表情でそう言う。

「二面性って……あんた人を多重人格みたいに言わないでよ」

「正直ちょっと疑うレベルだと思いますよ？」

「……Ｄデイー音ネ……あんたねえ……」

　Ｂ子は何か言おうとしたが、それを諦あきらめ、溜ため息いきを吐ついてから椅子に座り直した。

　□□Ｄ音。

　それが私の名前。

　この教室に集まる、いつもの面めん子つのひとり。

　Ｂ子と比べると黒くて重くて長い髪。表情は決して豊かとは言えないだろう。別段特に特徴がある訳ではない、普通の女子。

　……いや、どちらかというとＡ弥のように、根ね暗くらな印象を

与えるかもしれないかな。

「他にもね、似たような話で、こんな話もあるんだよ」

Ａエー弥ヤがニヤリと笑って続ける。

「……ま、まだあるわけ？」

「うん。『窓まど際ぎわの女性』って話なんだけどね……？　ある学生が、塾の帰り、狭い道を通って帰ってたんだ、それでふと道の脇にあるマンションを見てみるとね、窓からこちらを見て微笑ほほえんでいる女性が居たんだって」

「ふーん、なんだか素す敵てきな話っぽいね？」

　Ｃシー太タが笑顔で言う。

「……うん、とってもね。それで、その日はそのまま帰ったんだけど、次の日も、その次の日も彼女はその時間、窓際に居たんだって。でも彼が手を振ったりしても全くの無反応、彼女はただ、窓際に立っているだけ……」

「……うん」

「ある日、どうしても気になって仕方がなくなった彼は、日中にその道に行ってみたんだ。そうすると、その日も、その女性は窓際に居た……」

「……どういうこと……？」

「ずっとずーっと窓際に居るなんておかしい、そう思った彼は、目を凝こらしてよーく、彼女を見てみたんだ、そうすると……」

「──それは、首を吊つった死体だったんだ」

「……！」

「彼女は誰にも見つかる事無く、しばらくの間そうやって、虚うつろな目でこちらを見ていたんだ。学生から通報があって警察が調べると、遺い体たいはもうどうしようもない位くらい腐敗していたらしい……」

教室の中が一瞬の静寂に包まれる。

　Ａエー弥ヤは掌てのひらで顔を隠すようにして笑いを堪こらえていた。

　……ホント、気持ち悪い。でも、Ａ弥の噂うわさ話ばなしはいつだって秀逸だった。

　私達はこんな風にいつも都市伝説とか、そういった類たぐいの噂話を語り合っている。

　オカルト研究会のようなものだが、部活でも同好会でもなくただ単に集まって話すだけ。

　日にちが決められているわけでも、ノルマがあるわけでもない。

　正直に言うと、私は特にオカルトのようなものに興味があったわけではなかったが、ここに居る時のＢビー子コはとても楽しそうだったし、何より学校でも人気者のＢ子と話すことが出来るのは、ここで位のものだった。

　私はただ、Ｂ子と一緒に居たいから、ここに居た。

　本当に、ただ、それだけだった。

「あ、そろそろオレは帰ろうかな」

　しばらく時間が経たった後、Ｃシー太タがそう言ってバッグを取った。

「私もそろそろ……って、やっぱり、その人形、気になるわ」

　Ｂ子がＣ太のバッグに付いている人形を指先で弾はじきながらそう言った。

「えー、可愛かわいいのになあ？　Ｄデイー音ネちゃんも、そう思うでしょ？」

「いいえ、微み塵じんも可愛いとは思いませんよ？」

私はにっこりと笑ってそう言った。

　Ｃ太はそれでも笑顔を崩くずさず、

「あはは、Ｄ音ちゃんらしい言い方だなあ」

　と答えた。

「……人形といえば、都市伝説の『ひとりかくれんぼ』でも、人形を使うんだよね」

　Ａ弥も今日は帰るようで、バッグを手に取っている。

「ひとりかくれんぼ？」

「うん、人形かぬいぐるみを使った、降こう霊れい術じゆつみたいなものの一種かな。最終的にはそれを切り刻きざまなきゃいけないんだけどね」

「……ふーん、あ、ぬいぐるみといえばオレはＡエー弥ヤとの小さい頃の事を思い出すな」

「……ん？」

「ううん。ただ、もし『ひとりかくれんぼ』をやるにしても、あのぬいぐるみは、使わないで欲しいなって」

「……なんのこと？」

「なんでもないよ」

　Ｃシー太タは笑顔のままだった。

　━━小さい頃、お人形……。

　なんだろう、確か、私、小さい頃、大事に、大事にしていたお人形があったはず。

　そうだ、名前は、リリカ。お友達で、あんなに、あんなに好き

だったのに……。

　──今、どこにあるのだろう？

「……Ｄデイー音ネ？　帰んないの？」

「！」

　気がつくとＢビー子コが教室のドアの所から呼びかけていた。

「……あ、帰るよー、ごめんね」

「……？」

　私はバッグを取ると、廊ろう下かの方へと小走りで駆かけていった。

　帰宅途中、みんなと別れた後も、ずっと気になっていた。

　幼い頃好きだった、あの人形……。

　私はどうしてあんなにリリカの事を好きだったのだろう？

　そして、今どこにあるんだろう？

　……なんで、遊ばなくなったんだろう……？

　つい最近思い出したような気がするのに、思い出す事が出来ない。

　この胸のざわめきは一体……。

　家に帰ると私は、お人形がしまってある可能性のある場所をすべて探してみた。

部屋のクローゼットの奥、物もの置おきの中……しかし、どこを探しても、見つける事が出来なかった。

──一体、リリカはどこにいったのだろう……。

*

翌日の放課後、私はＢビー子コと合流すると、今日も旧校舎へと向かった。

二階に上がり、元音楽室のドアを開けると、そこにはすでに先客がいた。

「……おや？　今日もずいぶんとお怒いかりだね？」

Ｃシー太タだ。お怒りというのは、Ｂ子の事を言っているのだろう。

今日学校内で広まっていた噂うわさ話ばなしの件で、確かにＢ子はピリピリとしていた。

「……あんたの幼おさな馴な染じみは、やっぱりどうにかならないの？」

私とＢ子は自分の荷物を置きつつ、なんとなくいつもこのあたりという席に座った。

「ああ、あの噂？　傑けつ作さくだよね？　相変わらず最高だよ」

「……あんたねえ……」

Ｂ子が立ち上がろうとしたところで、再ふたたび教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　□□Ａエー弥ヤだ。

「やあじゃないわよ……あんたの悪あく趣しゅ味みはいいけどさ、人のことネタにするの、いい加か減げんやめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……昨日に引き続き、しらばっくれてんじゃないわよ。噂が悪化してるじゃないの」

　Ｂ子は怒りを必死に抑おさえている。

「ほうら、火のない所には煙が立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗談を言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶然誰かが見たら、きっとニセモノだと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「……それはそうと、最近少し気になっていることがあるんだ」

　いよいよＢ子がＡ弥に詰め寄ろうとしたところで、Ａ弥が唐突に切り出す。

「気のせいなのか気の迷いなのか、将はた又また何かの怪奇現象なのかもしれないけど」

「……怪奇現象？」

　椅子から立ち上がっていたＢビー子コは、Ａエー弥ヤに向いて座り直した。

「そう……最近朝起きるとね、確実に誰かからの視線を感じるんだ」

「家族……とかではなくてですか？」

「うん、両親は早く出かけるからね」

「じゃあ誰かが外から見てる～とか？」

「そういうのじゃなくてもっとこう、第三者からの視線を感じるんだよね……。まるで、世界の上から覗のぞかれているような感覚……。もちろん、振り向いてみても何もない、そういう事が頻ひん繁ぱんに起きてるんだ」

「……ふーん」

「座ざ敷しき童わらしとか、そういったものかな……」

「メリーさんだったら電話とか掛かってくるんだよね？」

「うーん……」

　Ａ弥がひとつ呼吸を置いてから、さらに続けた。

「ひとつ、気になることがあるんだけど」

「何？」

「この間、こっくりさんをやったじゃない？　僕とＢ子とＣシー太タの３人で……」

「ああ……」

「──翌日からなんだよね、視線を感じるようになったの……だからこれは、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』のせいなんじゃないかなって、思ってるんだ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

――『終焉ノ栞』

Ａ弥から聞いた話によると、この学校のどこかに『終焉オワリノ本ホン』と『終焉ノ栞』というものが隠されているらしい。その本にはこの世の中のありとあらゆる噂うわさ話ばなしが記載されており、栞しおりの挟はさまっているページを開くと、その噂が現実のものになってしまうというのだ。

噂だけ聞くとなんて事はない。けれど、私達にとってこの噂が他の噂とは違い、重要なことには理由があった。

――どうやら、この本と栞は存在するらしい。

ちょうど十年前、この旧校舎が実質的に使われなくなったその年、この学校で不可解な連続殺人が起こっている。

これは、新聞などにも載のっている事実だそうだ。

どの先生に聞いても、不自然な回答しかしてくれない。

しかし、この学校のどの生徒も一度は耳にしたことがある有名な話である。

なぜそんな前の事件について、ほとんどの生徒が知っているかというと、それはもちろん事件がまるで怪談のような形で語り継がれているからである。

――十年前のあの事件も……彼らが『終シユウ焉エンノ栞シオリ』を手に入れたからだ。

そんな風に、『終焉ノ栞』の噂うわさ話ばなしは、十年前の事件

とともに語られる事が多い。

　しかし、Ａエー弥ヤの発見をきっかけに、私達の活動はにわかに活発になっていた。

　──その発見というのが、『十年前の日記』だ。

　十年前、この旧校舎で同じように「オカルト話」を集めていた生徒達による、交換日記。

　彼らが集めた話は、これまでに聞いたことのないものも多かった。

　そしてその中で、『終焉オワリノ本ホン』と『終焉ノ栞』という、今でもこの学校に伝わる伝説について触れられていた。

　彼らはこれらを手に入れ、そして……──死んだ。

　これまでは週に一度集まるか集まらないか程度だったのだが、今はほぼ毎日のように誰かしらがこの教室にいる。

　数日前も、実際に日記に書いてある方法で、こっくりさんを行おうと試みたそうだ。

　その時は私はいなかったのだが、いざ始めてみるととてつもない感覚に襲おそわれて、恐怖のあまり途中でやめてしまったそうだ。

　今日は旧校舎のメンバーが全員集まっている。

「……とにかく、前回の『こっくりさん』は失敗だった」

　Ａ弥はその言葉を口にし、さらに続ける。

「失敗って……」

「『終焉ノ本』も『終焉ノ栞』も手に入らなかっただろ？」

「……確かに、ルール通りじゃなかったけど……でも……」

　教室の中が静寂に包まれる。

　私は、彼の次の言葉を予想し、本当に苛いら立だたしいと、ただそう思った。

「……もう一度やろうよ」

内緒ａｎＤシークII　□いつもの非日常ー

　翌日、私は朝から最悪の気分だった。

　昨日、あの旧校舎で「あんなこと」が起こった事も、もちろんその理由のひとつだが、私は本当の恐怖というものを、その時はまだ、全く理解していなかった。

　　　*

「……もう一度やろうよ」

　Ａ弥の言葉によって、私達は日記に書いてある通りに「こっくりさん」を始めた。

　やり方はよくあるこっくりさんのやり方だそうだ。

　Ａ３サイズ位くらいの紙の真ん中に鳥とり居いを描き、その左右に「はい」「いいえ」を書く。その下に右側から並べて「あいうえお・かきくけこ……」と五十音を書き、さらに数字を１～１０まで書く。

　コインはＡ弥が持っていた十円玉を使うことにした。

　みんなで十円玉に人差し指を置いた。人数が多いので、少し指を置きづらい。

　カーテンを閉め、部屋を真っ暗にして、テレビをつけてその明かりだけで行う。

「こっくりさん、こっくりさん、もしおいでになりましたら、『はい』の位置までお進みください」

十円玉はゆっくりと「はい」の位置まで動いていった。

　前回はこれ以上進めるのが怖く、ここで終了させてしまっていたらしい。

「これから、みんなにひとつずつ質問をしていく。まずは……Ｄデイー音ネ……」

「じゃあ、Ｄ音に好きな人は居ますか？」

「そんなつまらない質問でいいんですか？」

　Ｂビー子コがいたずらっぽく言ったその質問に、私は表情を変えずに答える。

「あ、動き出した」

「…………『はい』だって……」

「Ｄ音！　好きな人いるの!?」

「え？　だって、私、Ｂ子ちゃんのことが大好きですから」

　満面の笑顔で答える。Ｂ子はその答えに納得が行かないようで肩をすくめて見せた。

「ふふふっ、相変わらずＢ子はＤ音に弱いね」

「うっさい」

　おどけているように見えるが、その裏に言葉に出来ない緊張を感じる。

　みんな、何かが起こって欲しいという気持ちと、何も起こらないで欲しいという矛む盾じゅんした気持ちを抱いているのだろう。

「じゃあＢ子ちゃんには好きな人は居ますか？」

　私はおどけた雰ふん囲い気きのまま、Ｂ子に質問を返した。

「ちょっと！　Ｄ音！　何聞いてるのよ!?」

「ふふふっ、お返しです」

　鳥とり居いの位置まで戻っていた十円玉は、ゆっくりと動いていく。

「……あ、あ……もう……」

　Ｂ子がうろたえている。

　うろたえる姿も可愛かわいいなと思いながら、私はＢ子の事を見つめていた。

　そして十円玉は「はい」の位置で止まった。

　……まあ、そうでしょうね。

「『はい』だって……ふーん……」

「ちょっとＡエー弥ヤ！　な、何よその興味ありませんみたいな態度は！」

「……いや、そんな答えが分からないような質問してもしょうがないし」

　Ａエー弥ヤがやれやれ、という雰ふん囲い気きで言った。

「……そ、そうだけど……」

　Ｂビー子コは少しだけいじけたような顔をすると、話題を変えるためか、すぐに違う質問をした。

「あ、じゃ、じゃあさ、Ａ弥の昨日の晩ばん御ご飯はんは魚である！」

「……何それ？」

　その質問に、Ａ弥は呆あきれたような顔をしている。

「……だ、だって、答えは分かるでしょ？」

「……まあそうだけど……」

「あ、動き出した」

「…………『いいえ』だって……何食べたの？」

「……ハンバーグ」

「じゃ、じゃあ合ってるね……こっくりさんこっくりさん鳥とり居いの位置までお戻りください」

「ハンバーグかー、Ａ弥の家のハンバーグ美お味いしいんだよね、また食べたいな」

　Ｃシー太タが小声で呟つぶやいていた。Ａ弥はそれが聞こえていたのか聞こえていなかったのか、特に反応は無いようだった。

「それなら、こういう質問はどうかな？」

　Ｃ太が声を少しだけ大きくして、Ａ弥を見ながらこう言った。

「……オレの家に昔あったぬいぐるみは、ネコのぬいぐるみだ」

「え？」

「どういうこと？」

「……あ、動き出した」

　こっくりさんは「いいえ」へと動いて行った。

「Ｃ太、これってどういう……？」

「こっくりさんがちゃんと当たっているか、分からないじゃない？　だから、Ａ弥も知っている質問にしようと思ってね。……Ａ弥、オレの家にあったぬいぐるみは、何のぬいぐるみだったか……分かるよね？」

「…………」

　Ａ弥は少しだけ考えて、こう言った。

「……ウサギだよ」

　Ｃ太の表情が何やら歪ゆがんだような気がしたが、私にはよく見

る事が出来なかった。

　Ｂ子も状況がよく呑のみ込めていないようだ。

　一瞬の沈黙の後、私は、何かを言おうとして口を開いた……その時だった。

　──ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

「「「「「□□!?」」」」」

　突とつ如じよ、旧校舎に設置されたままの古いブラウン管のテレビがノイズを立てながら点灯した。

「何!?」

「きゃああああああ！」

「……まさか！」

「…………」

『──ひとりの裏うら切ぎり者もの『キツネ』によってゲームは始まった』

　無機質な声が教室に響く。

まるで脳に直接流し込まれるかのような不快なノイズ。

『抜け出したければ以下の条件に注意をし、終しゆう焉えんを迎えよ。

　──さあ、楽しい終焉ゲームの始まり始まり』

・ゲームの終焉を迎えるには「キツネ」を殺せ。

・「キツネ」を見つけることが出来なければ、それ以外は死ぬ。

・「キツネ」を探しながら、こっくりさんのお願いに従え。

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・指示の遂行を放ほう棄きした場合にも死ぬ。

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られた場合には、知ったその者が死ぬ。

・このゲームは終焉を迎えるまで絶対に抜け出す事は出来ない。
……絶対に。

　淡々と語られる意味の分からない言葉の羅ら列れつ。

　質たちの悪い冗談だと笑い飛ばしてやりたいのだが、絶対的な恐怖が、一度経験した事のあるような絶望的な未来の予感が、みんなに、これが只ただ事ごとでないと告げていた。

「…………っ」

──ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

　Ｃシー太タがようやく声を絞り出そうとしたところで、再ふたたび激しいノイズ。

　画面上に映る男の顔がこの世のものではないかのように歪ゆがみ、笑い顔と困り顔と泣き顔と怒り顔とを行き来する。

　──そして訪れる静寂。

「……な、なんなんですか……い、今の……？」

「……分からない」

「……『キツネ？』『裏うら切ぎり者もの』だって……？」

「……た、質の悪い冗談でしょ……？」

「…………」

　一同は沈黙し、お互いを見た。

　薄暗い部屋の中、誰もが青白い顔をしていたと思う。

　そこからかなり長い時間……実際には一分にも満たなかったかもしれないが……沈黙は続いた。そして誰かの「……とりあえず今日は帰ろう……」という声に促うながされるまま、私達は学校を後にした。

　私は家に帰ってからも、言いようの無い不安感を覚え、夢であって欲しいと願いながら、そのままベッドへと潜もぐり込んだ。

*

━そして次の日、これが夢では無く、本当の恐怖の始まりだと知る。

　いや、もしかすると、何度も何度も繰り返される悪夢の中で迷子になってしまっているのかもしれない。

　朝のまどろみの中、私はベッドの一部にちょっとした違和感を覚えた。

　誰かに押さえつけられているような感覚……金かな縛しばり？　いや、違う……何かが乗っている。そんなに重くはない。

　恐おそる恐る布団ふとんをどけると、「ドン」と重量感を感じさせる音をさせてベッドからそれは落ちた。

　真っ黒な表紙。

　辞書よりも大きく、古めいた本の表紙。

　……そして、そこに挟はさまった……栞しおり。

「……ひっ！」

　私は瞬時にこれが「良くないものだ」と感じた。

　肌感覚で分かる。これは、遊びでも冗談でもない。

　━本物の、『終焉オワリノ本ホン』と『終シユウ焉エンノ栞シオリ』だ。

「……な、なんで……!?」

　私は恐怖と動揺のあまり、それ以上声を出す事が出来なかった。

それからしばらくの間、本を見つめたまま私はベッドの上で固まっていた。

　一体どれ位くらいの時間が経たっただろう。

　精神的に落ち着いたところで、私はその本をバッグの中にしまった。

　そして素早く準備をすると、学校へと足を早めた。

　一度混乱したからなのか、心の中は妙に静かだった。

　この本をどうにかして捨てなければいけない。

　私にはまだ手紙というやつが届いていない。手紙が届く前にこの本と栞を捨てる事が出来れば、ゲームは始まらないで済むんじゃないか、そんな風なことを安易に考えてしまった。

　この本さえ……この本さえ……!!

「あれ？　Ｄデイー音ネちゃん、おはよう～！」

　靴箱に着いた所で突とつ如じよ背後から声を掛けられる。

　クラスメイトの女子、確か陸上部に所属していて、誰にでも優しく明るい、クラスでもいつも中心にいるような子。そしてそれがゆえに、私にもたまに話し掛けてくる。

　私は、彼女のその優しさに対して逆さか恨うらみをするようなほど卑ひ屈くつではないつもりだが、それはとても偽善的だな、と思っていた。

　本当は苦手な癖くせに、何を考えてるのか分からない、なんて思っている癖に、無理して話し掛けたりしなくていいのに。

「早いんだね～私はね、朝練があるからいつもこれ位なんだけど……」

「……そう……私、急いで……」

　私は会話もそこそこに、靴箱を開けてその場を立ち去ろうとした。

しかし、そこで、あってはいけない物が目に入ってきた。

　靴箱の中に、一通の手紙。

「その」映像が、悪寒と共に体中を走り抜けた。

「……っ！」

「ん？　あれ？　Ｄデイー音ネちゃん、その手紙何～？　ね、もしかしたら……ラブレター？」

　私はしまった、と思った。

　彼女はその性格ゆえにこの手紙の中身を見たがる事だろう、でも、それは……。

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られたりした場合には、知ったその者が死ぬ。

　いや、まさかそんな。でも、駄目だ、もしあれが、あれが本当だったりしたら……！

　私が頭の中であれこれと考えを巡めぐらせている内に、彼女が突然その手紙に手を伸ばした。

「……あっ！」

「大丈夫大丈夫！　こういうのは友達に相談した方がいいんだって～」

　駄目だ、でも、そんな事……あるわけない……。あれが、「その手紙」だって決まったわけでもないし……。でも、これがやっぱり本物だとしたら……!!

「……駄目っ」

「……
なによこれ？」

「──っ！」

　すでに手紙を開いてしまっていた彼女の表情から、一切の感情が消え失せ、全くの素すの表情のまま、彼女はそういった。

　その後、汚いものでも見るかのように私を睨にらむと、手紙を持ったまま、ブツブツと何かを呟つぶやいて校舎の中へと歩いていく。

　私はただ恐怖のあまりその場から動けなくなってしまった。

*

　そして放課後、私はまだ「手紙」の中も見られず、本も栞しおりも捨てられないままだったが、旧校舎へと足を運んだ。そこにはすでにみんなが集まっている。

「…………！」

　Ｂビー子コは一瞬だけこちらを見ると、すぐに顔を反対の方へと向けた。

　どうしたのだろう、もしかしたら、彼女にもすでに何かおかしなことが起こっているのかもしれない。

　私は平静を装いながら、みんなの会話に加わる。

「……結局、昨日のって……なんだったんでしょうね？」

「……今の段階では分からない……ただの手の込んだ悪戯いたずらだって可能性もあると思う……悔しいけど……」

Ａエー弥ヤの言葉に少しだけ安あん堵どするようにＢ子が顔を上げる。

　言えない。私のところに、「終シユウ焉エンノ栞シオリ」が届いたなんて、言えない。

「……でも、もし本当だとしたら、この中にひとり……」

「──やめて！」

　Ｂ子は突然叫さけび、耳を塞ふさぐようにして頭を抱える。

　私はその姿がとても可愛かわいいと思った。

　恐おそらく、私の精神状態も今、まともではないのだろう。

　自分は恐ろしいとか、怖いという感情をうまく表現出来ない。その分、大好きなＢ子が代わりに怯おびえてくれているような気がして、嬉しかったのだ。

　私は、判断力も低下した状態で、無音で写真を撮るアプリを立ち上げ、いつもするようにＢ子を隠し撮りしようとした。

　画面越しにＢ子を見ると、ちょうど教室の外の窓から入り込む西日で少し逆光のようになって素す敵てきだった。

　シャッターボタンを押そうとしたところで、何かの違和感を覚えた。

　──ダン！！！！

　突とつ如じよもの凄すごい音が鳴ると、私達のいる旧校舎の音楽室の窓ガラスに巨大な影かげが現れた。

　──それは、人ひと影かげだった。

「きゃあああああああああ！！！」

　一瞬だけ遅れてＢ子の叫び声が聞こえる。

　私は恐怖のあまり、その人ひと影かげから目を離す事が出来なくなってしまった。

　その人影は、彼女だった。今朝私の手紙を見てしまった、陸上部の……。

　彼女は今、二階の空中に浮いて、教室の中を覗のぞき込むような形になっている。

　屋上から伸びているロープが、彼女の首を支え、虚うつろな目と目が合う。

「……ま、『窓まど際ぎわの女性』だ……」

　Ａエー弥ヤが恐怖に引きつった半笑いの表情のまま震ふるえている。

「……だ、誰か……呼ばなきゃ……」

　Ｃシー太タも怯おびえている。

　でも分かってない。私は、私は、私の恐怖はあなた達には一切分からない……!!

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られた場合には、知ったその者が死ぬ。

　このゲームは本物で、

　この本も栞しおりも本物で、

　どうにかしないと……！

目の前の、この、虚ろな目の、彼女のように……!!

――死ぬ。死ぬ!!

その後の記憶は曖あい昧まいだ。

どこからか先生達がやってきて、その後警察などに軽く事情を話したところで私達は早く帰るようにと解放された。

警察の断片的な情報と、後に聞いた話では、今回の事件は明らかに不明な点が多いのだそうだ。

旧校舎の屋上はそもそも立ち入りが出来ないようになっており、事件の後屋上に行っても、唯ゆい一いつの扉は南なん京きん錠じようでしっかりと施せ錠じようされたままだった。

さらに、屋上は新校舎の四階ベランダからよく見え、事件が起こったその時も、吹奏楽部の数人がベランダにいたそうだが、誰かが居るような気け配はいは無かったようだ。

ロープは、屋上にある柵さくを越えた先の３メートル位くらいのポールの上部分に厳重に縛しばりつけられていた。

一度柵を越え、ポールを登らないと難しい位置。

そんな場所にロープを結んでいたら、確実に新校舎の誰かが気がついた事だろう。

つまり、これは不ふ可か能のう殺さつ人じん……いや、不ふ可か能のう自じ殺さつなのである。

夜には一部のメディアがこの不可思議な事件を報道し、学校はとりあえず一週間の休校を決めた。

私はどうやって帰ってきたかも覚えていないが、家に帰ってからも、あの虚うつろな目に見られているような気がして、落ち着く事が出来なかった。

頭の中が真っ白のまま、バッグを置こうとしたところで、違和感

に気がつく。

……バッグが異常に軽かったのだ。

ゆっくりとバッグの中を確認すると、やはり、いつの間にか「終焉オワリノ本ホン」と「終シユウ焉エンノ栞シオリ」が無くなっていた。

代わりに、あの女生徒が持っていってしまった、あの「手紙」が入っていた。

「……っ！」

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・このゲームは終焉を迎えるまで絶対に抜け出す事は出来ない。……絶対に。

逃のがれる事は出来ない……。

私は、この「手紙」から逃れる事は出来ないのだ……。

覚悟を決めた私は、ゆっくりとその封筒から便びん箋せんを取り出し、中を開いた。

―ひとりかくれんぼ　制作者：Ｄデイー音ネ―

「……やっぱり……」

予想していた絶望が襲おそう。

あの子は私のせいで、私が止められなかったせいで、「キツネ」によって殺されたのだ。

私のせいで、私のせいで……。

数時間前の記憶がフラッシュバックする。

明あかるくて決して悪い人間では無いはずのあの子が、最後に見せた醜悪な表情。

目を瞑つむり、耳を塞ふさいで必死に忘れようとするが、あの表情が、どうしても忘れる事が出来ない。そして、旧校舎の外から見ていたあの、あの、虚うつろな目……！

私はすがるような気持ちで携帯を手にした、あの子の死は私のせいだと、Ｂビー子コ達に伝えるべきかと思ったのだ。

しかし、すぐに他の誰かに手紙の事を伝えるべきではないと思い、手を止める。

これ以上、私のせいで人を巻き込みたくない。

私はこっそりと隠し撮りしていたＢ子の写真を見て、せめて精神的な落ち着きを取り戻そうと思った。

写真を見ると、そこには先ほど写真を撮ったＢ子の写真があった。

しかし、そこにはなぜか同じ写真が５枚も写っていた。

いや、これは、同じ写真ではない。

写真を撮る時に覚えた違和感。それは、なぜか連写モードになっていたことだった。

私は、深く考えずに１枚１枚を大きく表示させ、確認していく。

……よく考えると判断力が低下していたのだと思う。

どの写真も怯おびえるＢ子が可愛かわいらしく写っている。

　吸い込まれるように、暗示にかかったかのように、１枚、２枚、３枚、４枚と表示させ、最後の５枚目を表示させたところで、私は声にならない悲鳴を上げた。

「……！」

　そこには、こちらを向いて微笑ほほえむ、陸上部のクラスメイトが写っていた。

　落下の瞬間だというのに、確かに私の方を向いて微笑んでいる。

　右手には……「手紙」を持っていた。

　Ａエー弥ヤの話を思い出す。「窓まど際ぎわの女性」「笑う自殺者」。

「……いやあああああああああああああああ!!」

　突きつけられた恐怖が、私の心を抉えぐり、何度も何度も惨劇をフラッシュバックさせる。

　処理しきれなくなった脳が私の涙るい腺せんを刺激して、涙なみだと嗚お咽えつとを吐はき出させた。

　　　＊

それから一体何時間が経たったか分からない。

　現実は……この、物語の中のような現実は変わるわけもなく、目の前には「手紙」が置かれたままになっていた。

　私の心はとっくに許容量を超えてしまったのか、それとも、ようやく何かの決心が出来たのか、不安を抱えたままではあるものの、ひとつの方向へと収束しようとしていた。

　私はとっくにこのゲームに巻き込まれているんだ。

　もう一度ゲームのルールを思い出す。

・ゲームの終しゆう焉えんを迎えるには「キツネ」を殺せ。

　殺す？　そんなの無理に決まってる……。

　けれど、「キツネ」を見つけ出さないと、私は確実に殺されてしまう……。

　突とつ如じよ突きつけられた在あり来きたりな悲劇。

「……なんで……」

　でも、とにかく、なんとかしなくちゃ……。

　私は逃げ出してしまいたい気持ちと、どこにも逃げられない絶望感の狭間で嗚咽を漏らしながら、まずは「キツネ」を探してみる事に決めた……。

内緒ａｎＤシークIII　初夏の噂うわさー

　次の日から、私はさっそく活動を開始する。

　まずは、情報を集めるところから始めることにした。

　集める情報は、「十年前の事件」についてだ。

　Ａエー弥ヤからの話や、学校に伝わる噂話によると、十年前、旧校舎に集まっていた４人の生徒達が変死体で発見されたということだ。噂では、彼らは「終シユウ焉エンノ栞シオリ」を手に入れてしまったために死んだとされている。

　しかし、実際に起こった事件だとしたら、もっと別の事も記しるされているはずだ。

　私はまずは学校の図書資料室に向かうため、街へと向かった。

　外は湿度が高く、早足で歩くと、うっすらとかいた汗のせいで服が張り付き、独特の不快感を与えていた。

　学校と家との間にあるショッピングモールの近くを通ると、そこには数人の知り合いを見つけることが出来た。

　彼らにとっては、同級生の自殺も、不可解な死も、現実味などなくフィクションの出来事のように感じるのだろう、この度の休校だってただの休みにしか感じられないのだ。

　中には恐おそらくカップルだろうという男女も見える。

　私はそれを見て、いつも以上に不ふ愉ゆ快かいさを感じるのだった。

　……しかし、そこで思わぬ人物を見かけることになる。

間違えようがない、私がいつも見ていた、あのリボン。

　人ごみの中でも一ひと際きわ目め立だつ、可愛かわいらしさ。

　□□Ｂビー子コだ。

　どうして彼女がこんなところに？

　咄とつ嗟さに物陰に隠れて彼女の事を観察する。

　彼女は誰かを探しているようだった。

　……まさか、Ｂ子まで、こんな状況の中で……？　あり得ない。そんな事、あるはずがないよ……。違う！　違う！

　彼女が誰かを見つけたようで駆かけ寄っていく。

　そこにいる「誰か」を見ようとしたところで、突とつ如じょ風が吹いた。

「……っ！」

　何かが入ったようで、目とコンタクトレンズとの間に入ったゴミが私の目を痛めつける。ほんの数秒だがＢビー子コから視線を外し、片方のコンタクトを一旦外した。

　片目のみで、ピントが合わなかったこともあるが、そこにはすでに、Ｂ子も、Ｂ子が待っていた「誰か」も見つけることが出来なかった。

「……Ｂ子？」

　──消えた？　違う……逃げた？　なぜ？　なんのために？　もしかして、私が見ていた事に気がついたから？

　私は「キツネ」について思考を巡めぐらせる。

旧校舎に居た、誰かが裏うら切ぎり者もの。でも、それがひとりとも限らない。

　もしかしたら、私以外のみんなが裏切り者の可能性だってある……。

　思考を遮さえぎるように頭を振ると、コンタクトを戻すために、一度ショッピングモールの中のトイレへと向かった。

　今は何を考えたって答えが出ない……。

「……よし」

　私はコンタクトをつけ直すと、鏡の中の自分に向き合った。

……あれ？　私の目の色……。

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ、Ｂビー子コと同じ、薄い茶色の目の色になった気がした。再度見直してみると、いつものように、黒い……。

……気のせい……か。

ショッピングモールを出ると学校へと向かった。

学校は休校のためもあって、人の気け配はいを感じない。

数日はメディアの記者やカメラマンが居たようだが現在は居なくなってしまっている。

私は裏門から入ると、校舎の方に向かった。

もしかしたら校舎自体が開いていない可能性も考えたが、こんな状況でも一部の教師が出てきているようだった。

新校舎の中の図書室と図書資料室に向かっている所で、私は鍵かぎを借りてこなければいけないことに気がついた。

……もしかしたら、開いてる、なんてことないかな？

図書室と図書資料室はもうすぐ近くだったので、そんな事を思いながらまずは向かってみることにした。

その時は「開いてないよね」なんて思いながらだったものの、予想に反して、図書室の扉は開けられたままになっていた。

……休みでも開けっ放しなのかな……？

ゆっくりと中に入ると、資料室の方へと向かい地方新聞などがまとめられているコーナーに向かった。

年代別に並べられた新聞をまとめているバインダーを探す。

新聞は全ページが保管されているわけではなく、新聞部が地方の新聞と全国の新聞から気になった記事などを切り抜いてまとめ、年代ごとに整理しているのだそうだ。

もし学校で噂うわさに聞くような凄せい惨さんな事件が起こっているとすれば、確実にファイリングされていることだろう。

私はちょうど十年前のバインダーを手に取ると、近くの机の上にそれを広げながら、それらしい記事を探していった。

しかし、ページをめくってもめくっても、それらしい記事を見つけることが出来ない。

それどころか、一部の記事がごっそりと無くなっている痕こん跡せきがある。

これは、どう考えても、ここに「十年前の事件」の記事があったのだろう。

隠されている？　それとも……？

「……！」

私は急に視線を感じた気がして立ち上がった。しかし、探しても誰も居ない……。

私はもうここに居ても仕方がないと思い、この地域にある市立図書館の方へと向かった。

この図書館は学区から少し外れたところにあった。小さめな図書

館なうえに、今日は平日のお昼過ぎという事で私の他には利用者は居ないようだった。

　職員はカウンターにひとりいるだけで、本棚の一番奥のテーブルに座った私は、ひとりきりと言っていい状態だった。

　私はここでも同じように地方新聞のまとめられているバインダーを広げた。

　学校のものよりもよりたくさんの資料が集められているようで、目的の記事にたどり着くまでに少し時間が掛かってしまった。

　しかし、ここにはしっかりと十年前の事件の記事が残っていた。

「……これだ……」

　学校の部活動中に事故か　４名が死亡──。

　やはり現実にあった出来事だったんだ……。

　突きつけられた現実に目眩を感じながらも、もっと、詳しい情報は無いのか、私は夢中になって他の記事を探ろうとした、あまりにも夢中になっていたために、すぐ後ろにいる人ひと影かげに気がつく事が出来ずにいた。

　──トン

「……ひっ！」

　突然肩を叩たたかれたことに驚いて振り返ると、すぐ後ろには見知った人物が立っていた。

　Ｂビー子コだ。その表情はなぜか嫌けん悪お感かんのようなもの

に満ち溢あふれていた。

「……ど、どうしたのですか……？　こんなとこ──」

「何してるの？」

「……え？」

「さっきから、何をしてるのって聞いてるの」

「……」

　私にとってＢビー子コは特別な人物だった。私は友人として以上の好意を抱いていると思う。それだけに、彼女の事を巻き込むことだけは、絶対にしたくなかった。

　何より、私は彼女に嫌われたくなかったのだ。

「……あは、どうしたんですか？　Ｂ子ちゃん何か怒って──」

「さっきも！　ショッピングモールで誰かを探してたよね？」

「……え？」

「私のこと……？　ここにだって、先回りしようとして？」

「Ｂ子ちゃん、何を言っているのか……」

　思考回路が混線していた。Ｂ子は一体何に怯おびえ、何を考えているというのだろう？　これではまるで、私の事を──。

「私、見てたの！」

「……え？」

「…………あの日、靴箱の所で……」

　想像の中の一番最悪なパターンが頭をよぎる。お願い、それだけは、それだけはやめて！

「あなたが『手紙』を見せたところ……あなたが彼女を殺したんでしょ！」

「……ち、違う……の……」

「もうやだもうやめてよ！　『キツネ』だって、もしかしたらＤデイー音ネじゃないかって、私……そうだとしたら、そうだとしたらもう……こんな悪夢終わらせてよ……！」

「……Ｂ子ちゃん、違うんです……私は……」

　何かを言おうとして、私は黙り込んでしまった。

　私が、何を言ったところで、彼女の事を安心させることは出来ないだろう。

　きっと、ショッピングモールに居たのだって……。

　気がついていたんだ、これが、私に出来る精せいーいつ杯ぱいだって。

　今、何を言ったところで信じては貰もらえないだろう。

　──それなら、私に出来る事は、ただ一つ。

「……Ｂビー子コちゃん」

「……な、何よ……」

「私が、Ｂ子ちゃんの事好きだって言ったの……」

「……え？」

　そう言っていつもと変わらない、精せいーいつ杯ぱいの笑顔を私は浮かべた。

「……嘘じゃないですからね？　……あれ」

　立ち尽くすＢ子の横を通り抜け、私は市立図書館を後にした。

　これから何が起ころうとも、私はもう、悩む事は無かった。

　　　＊

　家に帰る途中、神社の近くで再ふたたび知った顔を見つけた。

「……Ｄデイー音ネちゃん？」

　Ｃシー太タだ。いつものように笑顔を浮かべようとするが、その表情には力が無かった。

　私は少しだけ神社の中に入っていくと、Ｃ太に声を掛けた。

「……Ｃ太さん、どうしたんですか？」

「……ううん、なんでも……ない……」

「……？」

「……変な事聞くけどさ……今日、『オレ』に会ったり……してないよね？」

「……？　今会った……だけですけど……？」

「…………そうだよね……」

　Ｃ太は少しだけ安あん堵どしたように続ける。

「……みんな、おかしくなってるんだよ……」

「……どうしたんですか？　さっき会ったＢ子ちゃんもですが……いつもと違う……まるで、ニセモノみたいですよ？」

　ニセモノ……それは、私もそうなのだろう。

　こんな状況で、まともで居られるはずがない。

「……ニセモノ……か……」

「……本当に大丈夫ですか？」

「……うん……大丈夫……って言いたいけど、ね……」

「……そう、ですよね……」

　しばらくの沈黙。

「……Ｃシー太タさんは、『キツネ』は誰だと思います、か？」

「…………分からない……」

「私は、Ｂビー子コちゃんに、裏うら切ぎり者ものなんじゃないかって……そう言われました……」

「……Ｂ子が……？」

「……はい……」

「無理もないよ……今の状況は、誰だって不安だ……オレだってＤデイー音ネが『キツネ』かもしれないって思うし、そんな事を言うＢ子だって怪しく思う。……Ａエー弥ヤだって分からない……」

　Ｃ太はより一いつ層そう疲労感を漂わせ、私に向かってこう言った。

「……でも、もし、もしも、だよ？　Ｄ音ちゃんが『キツネ』の正体を突き止めて、このゲームを終わらせる事が出来るようになった

ら……躊ちゆう躇ちよせず、ひと思いに……終わらせて欲しい」

　ゲームを終わらせる……。

　私は、「キツネ」の正体を分かっていない。

　でも、ひとつだけ出来る事があるとしたら、自分が裏切り者じゃないという事を証明するということだけ……。

　これからの私の行為で、果たして何かが分かるのだろうか、それとも……？

「…………はい」

　しばらくの沈黙の後、私はそう答えた。

　そして私達はそれ以上の言葉を交かわさずに、神社から離れていった。

　──早く、このゲームを、終わらせないと。

内緒ａｎＤシークⅣ　Re：今から自分が……ー

　家に戻り、自分の部屋に入ると、「手紙」を机の上に置いた。

　これから私は、「手紙」に書いてある都市伝説を実行しようと決めていた。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・指示の遂行を放ほう棄きした場合にも死ぬ。

　ゲームのルールによると、こっくりさんのお願いを遂行したところで、「キツネ」について何かが分かる訳では無いようだ。

　しかし、これを実行することで、「終シユウ焉エン ノ栞シオリ」の真相に、少しでも近づける気がする。

　ゲームはどんなに理り不ふ尽じんなルールであっても、そのルールに従う事しか出来ない。

「手紙」の中に書いてあったのは、「ひとりかくれんぼ」という都市伝説の制作者が私であるという事。

　帰り道その都市伝説について検索してみた。Ａエー弥ヤは降こう霊れい術じゆつと言っていたが、有名な都市伝説なようでそのやり方については細部まで調べる事が出来た。

「……よし」

私は決心を固めると、コンタクトを外し、メガネを掛ける。

　一瞬だけボヤける世界。いつも通りの視界に戻ったところで……、

　━ダン!!

「……ひっ！」

　棚の上から何かが落ちてきた。

　それは、探しても探しても出てこなかった、あの人形……リリカだった。

　リリカは、首にリボンをつけた状態で、棚の上から宙ちゅう吊づりになっている。

　あり得ない現実に体中が粟あわ立だつ。リリカの虚うつろな目が陸上部の女の子とリンクして、記憶がフラッシュバックする。

　思考が一瞬だけ停止するが、ご都つ合ごう主義のリリカの登場が、より一いつ層そう私の決心を強固なものに変える。

「……私は……裏うら切ぎり者ものなんかじゃない……！」

　私は携帯電話を取り出すと、Ｂビー子コに対してメールを送る。

『Re：今から自分が裏切り者じゃないことを、証明してみせます』

　送信完了を見届けると、私はいよいよ「ひとりかくれんぼ」を実行することにした。

＊

　まずは手足があるぬいぐるみか人形を用意せよ。これは、「ご丁寧に用意された」リリカを使用することにした。

　私は確かに彼女の事が大好きだったし、彼女に近づきたいとも思っていた。

　幼少期独特の感情ではあるものの、リリカは私にとって確かに友達だった。

　いつもお話をして、仲良くしていた事を思い出すと、これから私が彼女にしなければいけないことに、胸が痛む。

　次に、お米を用意する。台所に行くが家族は居ないようだった。

　そのまま台所で塩水を作りコップに用意すると、居間へと向かった。

　そして、縫ぬい針ばりと赤い糸、ハサミとカッターナイフを手に入れる。

　これからは、ゲームを始める前の段階に入る。

　私はリリカに「ごめん……」と呟つぶやいて、彼女のお腹を切り割いた。

　そして、そこにお米と自分の爪を切って入れ、切り口を縫い合わせる。

　作業の間ずっと、誰かに見られているような気がして落ち着かなかった。

　人形の手や足、口にも赤い糸を縫い合わせてみるが、見た目だけで、とてもグロテスクなものに見えてくる。

「……まるで、血管みたい……」

　私はポツリと呟くと、次に塩水を持ったまま、両親の寝室の押し入れの襖ふすまの奥にそれを持って行った。これは、隠れる場所に

置いておくものらしい。

「……ぬいぐるみの名前は決まっている……」

　これで準備はすべて整った。

「……始めよう……」

　私は家中の電気をすべて消し、カーテンを閉め、テレビだけをつけた。テレビは砂嵐の画面を選択する。

「最初の鬼はＤデイー音ネだから。最初の鬼はＤ音だから。最初の鬼はＤ音だから──」

　無表情のままそう告げると、お風呂場に行き、浴槽の中にリリカを沈めた。

　水が暗闇の中の僅わずかな光を反射させ、まるで生きているかのようにリリカの表情を歪ゆがめる。

　彼女の表情は、悲しんでいるようにも、怒っているようにも見える。

　私は少しだけ罪悪感を感じた。

　リリカの目は私を見つめ、私もリリカの目を見つめていた。

　次に寝室に戻ると、出しておいたカッターナイフを手にとって、目を瞑つむり十秒ほど数える。

　いーち、にーい、さーん、よーん、ごー、ろーく、しーち、はー

ち、きゅーう……

　目を瞑っている間、私の真後ろに、誰かが居るような気がして、数が増える度にそれが近づいている気がして、私の腕にも足にも首にも、恐怖が纏まとわりついてきていた。

　━じゅう。

「もういいかい？」

　そう言うと、お風呂場へと行って、浴槽の蓋ふたを開け、リリカを取り出し……

　━腹を刺す。

　何度も、何度も、何度も……！　グチャリ、グチャリ、グチャリ。

　不器用に縫ぬわれた腹の隙すき間まから、水が入っているのだろう。

　不ぶ気き味みな音とともに、腹の間から液体が流れ出す。

　暗闇のせいで色が確認出来ないため、液体はまるで血液のように見えた。

　虚うつろな目にも水滴が溜たまり、まるで生きているかのようにこちらを見つめ、溜まっていた水滴が、頬ほほを伝った。

「次はリリカが鬼の番。次はリリカが鬼の番。次はリリカが鬼の番……！」

私は声を震ふるわせながらそう言うと、一度台所へと戻りカッターナイフを置いた後、塩水を置いておいた寝室に戻り、押し入れの中の襖ふすまの中へと隠れた。

　これからしばらく経たった後、塩水を少し口に含んでから出て、人形を探して、コップの残りの塩水、口に含んだ塩水の順に掛け、「私の勝ち」と３回宣言すれば、終了となるようだ。

　押し入れの奥で、私はいろいろな事を考える。

　クラスメイトのあの陸上部の女子生徒や、リリカの出現。

　こっくりさんの時に起こったあの放送はまだ、悪戯いたずらで実現可能かもしれないけれど……。

　もしかして、もしかすると……「キツネ」の正体は……。

　しばらく経った頃、突とつ如じよ、聞こえるべきではない音が、私の耳に響いてきた。

　ギッ。ギッ。

　廊ろう下かに足音が響いている。

　誰もいないはずの廊下に……なぜ!?

　私は息を殺して身を潜ひそめる。

　足音は次第に次第に近くなって来ているようだった。

　ギッ。ギッ。ギッ。ギッ。

もしかして、リリカが……!?

　私は、自分の腹が同じように引き裂かれる未来を想像する。

　リリカは私の腹の中から内蔵を引きずり出すと、こう宣言する。

「……私の勝ちよ」

　やだ、やだ、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い！

　ギッ。ギッ。ギッ。ギッ。ギッ。ギッ。ギッ。ギッ。

　私は思わず漏れてしまいそうになる声を、自分の掌てのひらで押さえつけながら、ゆっくりと、ゆっくりと、押し入れの隙すき間まを覗のぞく。

　──そこには、同じようにこちらを覗く、「目」があった。

「いやああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「……!!」

　押し入れの襖ふすまを開けて外に飛び出ると、そこには、私の予想だにしなかったものが存在していた。咄とつ嗟さに逃げようとする私の手首がつかまれる。思わず体のバランスを崩くずし、床に叩たたきつけられた。私は混乱しそうになる頭を必死で落ち着かせ、それの目を見る。

「××××××××!!」

　耳元で響いた声が、私の頭を急速に冷却し、体中の力を奪った。

「×××の××は、××××キ×××××だ」

　──そう言って、最期に私はクスリと笑った。

CHAPTER2

影踏みゲンガー

制作者:C太

影踏みゲンガーⅠ　視点Ｃとストラップ名ー

「あんたの幼おさな馴な染じみ！　ホントどうにかなんないの⁉」

　木造二階建ての旧校舎、その二階にある元音楽室に怒ど号ごうが鳴り響く。

　声を荒らげているのは学校でも一番と噂うわさされる美少女、Ｂビー子コだ。

　才さい色しよく兼けん備び、眉び目もく秀しゆう麗れい、人ひと当あたりもよく、誰に対しても優しい……というのはあくまでも表向きの設定らしく、この旧校舎の元音楽室の中では、彼女はむしろ気性が荒い方だろう。

　Ｂ子の後ろには、そんな苛いら立だっている彼女をニコニコと見つめる少女、Ｄデイー音ネが居た。

　長めの髪に、細見の身体。どちらかというと、「根ね暗くら」そうな印象を受ける。

　２人はいつもだいたい決まっているような位置に荷物を置くと、椅子に座った。

「ああ、あの噂？　傑けつ作さくだよね？」

　オレはニッコリと笑いながらとぼけてみせる。

「……あんたねえ……」

　Ｂ子がこちらに詰め寄ろうとしたところで、再ふたたび教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　Ａエー弥ヤだ。

Ａ弥はオレの幼馴染で、この旧校舎に集まるメンバーのひとりだった。

　整髪料をつけていないだろう、少し癖くせのついた髪の毛。目の下には隈くまがあり、少し三さん白ぱく眼がん気ぎ味みで、基本的には無表情。お世せ辞じにも好青年とは言えない外見をしている。

「やあじゃないわよ……あんたの悪あく趣しゅ味みはいいけどさ、人のことネタにするのなんてやめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

　Ｂ子は怒いかりを必死に抑おさえながらも、Ａ弥に睨にらみ寄っていく。

　怒っているのは、恐おそらくＡ弥が流したであろう、噂話についてだった。

　その噂というのが、Ｂ子のニセモノが徘はい徊かいしているというのだ、いや、正確にはドッペルゲンガーって言ったかな？

　とにかく、Ａ弥はそういった噂を流すのが趣味で、さらにはそういった噂を拡げるのがとても上手いのだった。

　ただ、よく考えてみると、Ａ弥はオレに関しての噂を流した事が無かった。

　幼馴染でずっと一緒に居るからだろうか……？

「……はあ……もう慣れたからいいけどさ……」

　Ｂビー子コはＡエー弥ヤに詰め寄っていこうとしたが、溜ため息いきを吐つくと席に座り直した。

「……ところで、噂うわさで流れていた、ドッペルゲンガーって、なんなんですか？」

　Ｄデイー音ネが質問する。

「……ああ」

　Ａ弥が口こう角かくの片方を少しだけ吊つり上げてそれに答える。

「ドイツ語で、『二重の歩く者』って意味なんだけどね、言葉の通り、特定の人物が同時刻に全く別の場所で現れる……ようはニセモノが出てくるっていう、超常現象の事だよ」

　ニセモノ……ね。

「この超常現象は全世界各地で目撃談が語られている、有名なものだよ。リンカーンや、芥あくた川がわ龍りゅう之の介すけも体験したなんて言われている。よく言われる補足情報としては、ニセモノは本人に関係がある場所で目撃される、ニセモノは周囲の人間とは一切会話をしない……そして、本人がニセモノと出会うと……本人が殺されてしまうってね……」

「……殺されるって、そ、そしたらどうなるのよ……？」

「さあ、諸説あるけど、ニセモノがそのまま本人に成り代わる。それでも周まわりが気がつかない……そんな感じじゃないかな」

　教室の中が一瞬の静寂に包まれる。

「……ちょ、わ、私は本物だからね！　っていうか、そんな質たちの悪い噂やめてよね……気き味みが悪いから！」

　噂を流された本人としては、確かに今の噂話は恐おそろしいかもしれない。

　最終的な結末が、誰にも気がつかれない事。そんな物語は、物語としては二流だ。

　ただ、在あり来きたりな結末よりも、その方がよっぽどリアリティがあるのかもしれない。

　まあ、なんにせよ、オレ達はこのようにして、いつも「噂話」を

収集している。

　噂……といってもその内容はほとんどがオカルトや都市伝説に分類されるものだ。

　やれ「口くち裂さけ女おんな」だの、「人じん面めん犬けん」だの……。

　そういった噂話を語り合ってるうちに、次第にこの旧校舎へと集まるようになった。

　部活でも同好会でもなく、ただ単に集まって話すだけ。

　さらに言うと、そのほとんどは、Ａ弥が集めてくるものだ。

　オレや、Ｄ音なんかはもともとそんなにオカルトには興味がないし、Ｂ子は見ての通り、意外に怖がりだから、好奇心はあっても、調べてくるなんてことはなかなか出来ないようだった。

「……そういえば、他にもこんな噂うわさ、知ってる？　最近知った話なんだけどね、『笑う自殺者』っていう都市伝説があるんだ」

　Ａエー弥ヤが再ふたたび収集した噂話を嬉き々きとして語り始めた。

　外は日が傾いてきたのか、夕焼けが真っ赤に空を染める。

　綺き麗れいだけれども、不ふ吉きつな色だな、そんな事を思いながら、オレは話を聞いていた。

「あ、そろそろオレは帰ろうかな」

　しばらく時間が経たった後、そう言ってバッグを取った。

「私もそろそろ……って、やっぱり、その人形、気になるわ」

　Ｂビー子コがオレのバッグについている人形を指先で弾はじきな

がらそう言った。

「えー、可愛かわいいのになあ？　Ｄデイー音ネちゃんも、そう思うでしょ？」

　キーホルダーとしてついている「やる気きへの木きさん」人形。

　エノキに顔がついたようなキャラクターなのだが、その表情が名前に反して、なんともやる気がない感じで、とても可愛らしいと思う。よく見るとＡ弥に少し似ている気もする。

　人気のキャラクターとかではないので、確かにクラスどころか、学校内でもオレ以外でつけている人を見た事はない。

買った時だって、よく分からない雑貨屋で見かけた、最後のひとつだった。

「いいえ、微み塵じんも可愛かわいいとは思いませんよ？」

Ｄデイー音ネはにっこりと笑ってそう言った。

オレはそれでも笑顔を崩くずさず、

「あはは、Ｄ音ちゃんらしい言い方だなあ」

と答えた。

「……人形といえば、都市伝説の『ひとりかくれんぼ』でも、人形を使うんだよね」

Ａエー弥ヤも今日は帰るようで、バッグを手に取っている。

「ひとりかくれんぼ？」

「うん、人形かぬいぐるみを使った、降こう霊れい術じゆつみたいなものの一種かな。最終的にはそれを切り刻きざまなきゃいけないんだけどね」

「……ふーん、あ、ぬいぐるみといえばオレはＡ弥との小さいころの事を思い出すな」

「……ん？」

オレは昔、Ａ弥にあげたウサギのぬいぐるみの事を思い出していた。

オレがＡ弥と一生仲良しでいようと思う、そのきっかけになったぬいぐるみ。

そのぬいぐるみが切り刻まれるとしたら、それは、耐えられないだろうな。

「ううん。ただ、もし『ひとりかくれんぼ』をやるにしても、あのぬいぐるみは、使わないで欲しいなって」

「……なんのこと？」

「なんでもないよ」

　オレはＡ弥に笑顔を投げかけると、そのまま会話を有う耶や無む耶やに流した。

*

　翌日の放課後、オレは今日も旧校舎の元音楽室へと来ていた。

　他のメンバーはまだ来ていないようで、教室の中にはオレひとりだった。

　しばらくすると、教室のドアを少しだけ勢いよく開けて、２人が現れた。

「……おや？　今日もずいぶんとお怒いかりだね？」

　Ｂビー子コとＤ音だ。Ｂ子は昨日以上に怒りが抑おさえきれないようだった。

　恐おそらく、今日学校内で広まっていた噂うわさ話ばなしの件だろう。昨日の話が、さらに具体性を持って、本当にあった話であるかのように広まっていた。

「……あんたの幼おさな馴な染じみは、やっぱりどうにかならないの？」

　Ｄデイー音ネとＢビー子コは荷物を置きつつ、なんとなくいつもこのあたりという席に座った。

「ああ、あの噂うわさ？　傑けつ作さくだよね？　相変わらず最高だよ」

「……あんたねえ……」

　Ｂ子が立ち上がろうとしたところで、再ふたたび教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　□□Ａエー弥ヤだ。

「やあじゃないわよ……あんたの悪あく趣しゆ味みはいいけどさ、人のことネタにするの、いい加か減げんやめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……昨日に引き続き、しらばっくれてんじゃないわよ。噂が悪化してるじゃないの」

　Ｂ子は怒いかりを必死に抑おさえている。

「ほうら、火のない所には煙が立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗談を言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶然誰かが見たら、きっとニセモノだと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「……それはそうと、最近少し気になっていることがあるんだ」

　いよいよＢ子がＡ弥に詰め寄ろうとしたところで、Ａ弥が唐突に切り出す。

「気のせいなのか気の迷いなのか、将はた又また何かの怪奇現象なのかもしれないけど」

「……怪奇現象？」

　椅子から立ち上がっていたＢ子は、Ａ弥に向いて座り直した。

「そう……最近朝起きるとね、確実に誰かからの視線を感じるんだ」

「家族……とかではなくてですか？」

「うん、両親は早く出かけるからね」

「じゃあ誰かが外から見てる～とか？」

「そういうのじゃなくてもっとこう、第三者からの視線を感じるんだよね……。まるで、世界の上から覗のぞかれているような感覚……。もちろん、振り向いてみても何もない、そういう事が頻ひん繁ぱんに起きてるんだ」

……誰かからの視線……か。

「……ふーん」

「座ざ敷しき童わらしとか、そういったものかな……」

「メリーさんだったら電話とか掛かってくるんだよね？」

「うーん……」

Ａエー弥ヤがひとつ呼吸を置いてから、さらに続けた。

「ひとつ、気になることがあるんだけど」

「なに？」

「この間、こっくりさんをやったじゃない？　僕とＢビー子コとＣシー太タの３人で……」

「ああ……」

「──翌日からなんだよね、視線を感じるようになったの……だからこれは、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』のせいなんじゃないかなって、思ってるんだ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

――「終焉ノ栞」

　これは、今、Ａ弥がもっとも熱くなっている「噂うわさ話ばなし」のひとつだった。オレはオカルトなどについては正直どうでもよかったが、本当に十年前に謎の事件が起こっていたのだとしたら、少し興味があった。

「……とにかく、前回の『こっくりさん』は失敗だった」

　Ａ弥はその言葉を口にし、さらに続ける。

「失敗って……」

「『終焉オワリノ本ホン』も『終焉ノ栞』も手に入らなかっただろ？」

「……確かに、ルール通りじゃなかったけど……でも……」

　教室の中が静寂に包まれる。

　オレは、彼の次の言葉を予想し、Ａ弥らしいなと、ただそう思った。

「……もう一度やろうよ」

　そうして、オレ達は、最悪の終焉ゲームに、巻き込まれる事になる……。

影踏みゲンガーII　□ある日聴いた噂うわさ-

―ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

　こっくりさんの途中で、突とつ如じよ流れた無機質なアナウンサーの声。脊せき髄ずいを抉えぐるような不快な声が、教室の中で不自然に響く。

　オレがようやく声を絞り出そうとしたところで、再ふたたび激しいノイズ。

　画面上に映る男の顔がこの世のものではないかのように歪ゆがみ、笑い顔と困り顔と泣き顔と怒り顔とを行き来する。

―そして訪れる静寂。

「……な、なんなんですか……い、今の……？」

「……分からない」

「……『キツネ？』『裏うら切ぎり者もの』だって……？」

「……た、質たちの悪い冗談でしょ……？」

「…………」

　一同は沈黙し、お互いを見た。

　薄暗い部屋の中、誰もが青白い顔をしていたと思う。

　一体、今のはなんだったのだろう……？

もしかしたら誰かの悪戯いたずら……とも考えたが、それにしても不自然な事が多すぎる。何より、肌感覚がこれが本物の悪夢なのだと予感させる。

Ａエー弥ヤはどうしているのだろうと見てみると、オレの考えている以上に恐怖に満ちた顔をしていた。きっとこういう都市伝説が好きなＡ弥のこと、今の現状にも喜んでいるのではと思っていたが、そうではなかったようだ。よく考えると、こういった都市伝説を誰よりも信じているのだ、恐怖も半端ではないのだろう。

そしてそこからかなり長い時間……実際には一分にも満たなかったかもしれないが、沈黙は続いた。そして誰かの「……とりあえず今日は帰ろう……」という声に促うながされるまま、オレ達は学校を後にした。

＊

結局オレはＡエー弥ヤと一緒に帰ったが、一言も話す事は無かった。

自分の家に着き、部屋の中に入ると、ＰＣの電源をオンにする。

すぐにいつもの見慣れた画面が立ち上がった。

──そこには、先ほど別れたばかりのＡ弥の姿が映っていた。

最初は冗談半分のつもりだった。

Ａ弥のバッグのポケットの奥の奥、そのさらに裏側に、全く気がつかないほどの小さい盗とう聴ちよう器きを仕掛けた事が始まりだった。

人の生活を覗のぞき見るという行為は、人付き合いの苦手なＡ弥の行動を見守ってあげるためだと自分を押し切る事で、さらにエスカレートしていった。

　もともと、家族ぐるみの付き合いがあるため、合あい鍵かぎの隠し場所も知っている。

　家の中で見つかったところで、怪しまれる事もない。

　オレはＡ弥の唯ゆい一いつにして無二の親友なんだから！

　そういった気持ちでオレは盗聴器や盗とう撮さつ器きを仕込み、Ａ弥の活動を監視していた。

「視線を感じる……ね」

　それがオレの視線だってこと、Ａ弥は全く気がついていないんだろうな。

　Ａ弥は部屋に戻るとベッドに横になり、胎たい児じのように膝ひざを抱え、震ふるえながら布団ふとんに潜もぐり込んだ。しかし、何度も布団を出ては周まわりを確認したり、テレビをつけたり消したりの繰り返しをしていた。

　正直に言うと、オレも先ほどから震えが止まらない。

　Ａ弥のそんな動きを見ながら、独ひとり言ごとを呟つぶやく事で、なんとか平静を保たもとうとしていた。

「……ほ、本当に……しょうがないなあ、Ａ弥は」

　そうだ、冷静に考えれば、本当にこんな事が起こるわけがない。

　死ぬだの殺すだの……。そんな事が出来るもんか。

　ここでしっかりしなくては、Ａ弥の事を助けてやれるのは、オレだけなんだから。

　……とはいえ、さすがに精神的な疲労はピークを迎えようとして

いる。

　オレはＰＣの電源を落とすと、ベッドに入った。

　　　＊

　そして翌日、オレは授業が終わった後、Ａ弥と合流し、旧校舎へと足を運んだ。

　そこにはすでにＢビー子コが待っていた。

「…………！」

　Ｂ子はこちらを見ると、何かを言いたそうに口を開いた。

「……どうしたの？　Ｂ子ちゃん」

「…………」

「……Ｂ子？」

「……き、昨日のって………………い、悪戯いたずらだよ……ね……？」

　Ｂ子の動揺が激しかった。確かに昨日の出来事は衝撃的だったが、それにしても過剰なまでの反応だ。

　もしかして、何かあったのだろうか？

「……っ」

　──ガラッ。

「…………！」

　Ｂ子が何かを言おうとしたところで、教室のドアが開き、Ｄデイー音ネが現れる。

　一瞬Ｂ子はＤ音を見たが、目を逸そらすと黙り込んでしまった。

「……結局、昨日のって……なんだったんでしょうね？」

　Ｄ音は気がついていないのか、会話に入ってきた。

「……今の段階では分からない……ただの手の込んだ悪戯だって可能性もあると思う……悔しいけど……」

　Ａエー弥ヤの言葉に少しだけ安あん堵どするようにＢ子が顔を上げる。

「……でも、もし本当だとしたら、この中にひとり……」

「──やめて！」

　Ｂ子は突然叫さけび、耳を塞ふさぐようにして頭を抱える。

　そして、その瞬間だった──、

　──ダン！！！！

　突とつ如じよもの凄すごい音が鳴ると、オレ達の居る旧校舎の音楽室の窓ガラスに巨大な影かげが現れた。

　──それは、人ひと影かげだった。

「きゃあああああああああ！！！」

　一瞬だけ遅れてＢ子の叫び声が聞こえる。

　オレは驚きのあまり、まだ思考が停止していた。

　Ａエー弥ヤを見ると、Ａ弥も驚きのあまり腰を抜かしたようで、座り込んでいた。

人ひと影かげは今、二階の空中に浮いて、教室の中を覗のぞき込むような形になっている。

　屋上から伸びているロープが、その首を支えていた。

「……ま、『窓まど際ぎわの女性』だ……」

　Ａ弥が恐怖に引きつった半笑いの表情のまま震ふるえている。

「……だ、誰か……呼ばなきゃ……」

　オレはようやく状況が理解出来ると、そう言って動き出そうとした。

　しかし、明らかにもう手遅れであるという事は誰の目にも明らかだ。

　呼ぶ……？　一体、誰を？

　結局の所、オレも頭が混乱したままで、何も動く事は出来なかった。

　その後、オレの記憶は途と切ぎれ途切れになっていた。

　しばらくすると、どこからか先生達がやってきて、その後警察などに軽く事情を話したところでオレ達は早く帰るようにと解放された。

　警察の断片的な情報と、後に聞いた話では、今回の事件は明らかに不明な点が多いのだそうだ。

「……そんなこと、あり得ない……」

　Ａ弥がポツリと呟つぶやいたその言葉だけが、なんだがやけに耳に残った。

　　　　＊

家に帰ると、ようやく現実を理解し始めたのか、急に恐怖が襲おそってきた。

　今まで恐怖だと思っていたものは、ただの驚きよう愕がくで、本当に恐怖を感じると、寒いのか熱いのか、痛いのか、痒かゆいのかも分からず、脳がパニックを起こしていた。

　オレは体を縮ちぢこまらせながら、毛布に包まる。

「……あの目が、あの目がオレを見てる……！」

　人の事を監視するのが楽しみだった自分が、そのさらに上の階層から監視されていたような気分。纏まとわりつく視線があまりにも不快で気持ちが悪い。

　先ほどの生徒の死体の目が、頭から離れない。

　自分だけがこんなに恐怖を感じているのだろうか？

　この恐怖は、自分だけのものなのだろうか……!?

　オレは居ても立っても居られず、ＰＣの電源をオンにする。

　Ａエー弥ヤは、Ａ弥は今頃どうしているのだろう……!?

　画面が立ち上がり、いつもと同じＡ弥の部屋が表示される──、

　──はずだった。

　一瞬だけ、ほんの一瞬だけ、そこには、明あきらかにＡ弥ではない他の誰かがカメラに映り、そして消えた。

「……!?」

…………今のは、一体、誰だ？

Ａ弥の家族ではないし、Ａ弥が家に呼ぶような友達は、オレ以外いない、はずだ。

Ａ弥は机の方を向いて何かをしているため、表情は見えない。

オレの脳裏に、最悪のシナリオが浮かぶ、もしかして、Ａエー弥ヤが「キツネ」に狙われているのでは……!?

「……Ａ弥ッ！」

　オレが口に出して名前を呼んだその瞬間、Ａ弥が振り返り……、

　━━こちらを向いた。

　ちょうどカメラの方向、今、スクリーン越しに目が合っている。

　……まさか、レンズに気がついた……？　あり得ない、……そんなこと。

　しばらくの間、意味も無く黙り込み、微動だにせず時間が経たつのを待つ。

　Ａ弥は一切表情を変えずにこちらを見ていたが、その後部屋をぐるりと見回すように頭を動かすと、そのままベッドに潜もぐり込み膝ひざを抱えるようにして眠ってしまった。

　……気のせいか？　先ほどの人ひと影かげも……Ａ弥の視線も……？

　オレはしばらくの間Ａ弥の部屋を監視していたが、特に何が起こるでも無かった。

　それよりも先ほどＡ弥がこちらを見ていた時の目が、画質がそこまで良くない事もあり、異常に怖く感じた。またしてもあの目を思い出させるようだった。

オレはＰＣの電源を落とすと、ベッドに入ろうと、椅子から立ち上がった。

　――振り返ると――……

「うわああああああああああああああああ!!」

　ベッドの上には見覚えの無い物が。

　――栞しおりの挟はさまれた古そうな本。

　皮ひ膚ふ感覚がオレに告げている。

　――本物だ、と。

　どういうことだよ！　どういうことだよ!!

　よりによって、オレのところに真っ先に!?

　そんな事ってあるもんか、そんな事って……！

　怖い！　怖い！　どうしよう！　どうしよう！　どうしたらいいんだ!?

　心臓の鼓動が早まる。

　ガクガク震ふるえる足を押さえつけ、ページがめくれないように本を掴つかんだ。

　まずは、これをどこかに処分しなきゃ……。

　とりあえずと自分のバッグの中にそれを仕し舞まい込むと、先ほどのＡエー弥ヤと同じように布団ふとんを被かぶり、膝ひざを抱えて震えながら目を閉じた。

影踏みゲンガーIII　ーふたりぼっちの作戦会議ー

　次の日が来た。

　オレはほとんど眠る事が出来ず、ただただ布団の中からアレが入ったバッグを見ていた。

　早くアレをどうにかしないといけないと思い、決心をして布団から出る。

　恐おそる恐るバッグを持ち上げたところで、感じずにはいられない違和感に気がついた。

　──バッグが、異常に軽い。

　どういうこと……だ？

　唾つばを飲み込み、恐る恐るバッグを開けると、そこには昨日確かに入れたはずの「終焉オワリノ本ホン」と「終シユウ焉エンノ栞シオリ」が無くなっていた。

　代わりに、見た事のない手紙が入っている。

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

「……ひっ！」

　昨日は確かにずっと、バッグを見ていたはずだ、たしかに睡魔が

襲おそってきた事もあったが、少なくとも誰かが部屋に入ってきたら確実に分かるだろう。

　現実には起こり得るはずがない、これは……これは……！

　オレは手紙を少し乱暴にバッグに戻す。

　理解する事は不可能だ、とにかく今は、この手紙をどうにかしないと。

　誰かに読ませるわけにはいかないし、とにかくこの手紙をどうにかして処分しよう。

　オレは混乱しつつ、外出するために服を着替えると、バッグと携帯を持って部屋を出ようとした。

　その時だった。

　──ピロリーン。

「……！」

　ちょうど携帯を持ったところで通知音が鳴る。

　いつの間にマナーモードじゃなくなっていたんだ？

　オレは訝いぶかしがりながら携帯の画面を見ると、それはツイッターの通知で、クラスメイトからのＤＭダイレクトメッセージが来た事を知らせるものだった。

《Ｃシー太タはっけーん！　神社で何してんのー？》

……？

　こいつ、何を言ってるんだ？

《オレ、今家でひとりだけど？》

　誰かと見間違えたのだろうとＤＭを返す。

《あれ？　だって、そこに、あ、いない？》

《見間違えかな？　ごめんなー昨日ほら、お前大変だったじゃん、ひとりだったから気になってさー見間違えならいいんだ、ごめんなー》

　ツイッターの画面を閉じる。

　勘違いだとは思うが、気き味みが悪い。

　神社だって……？

　学校の近くの神社、あそこには確かによく行っていた。特に子どもの頃はＡエー弥ヤと一緒に境けい内だいで遊んだりしていた。

　……いや、まさか……。

　□□♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪!!

「□□！」

再ふたたび携帯が鳴る。今度はメールの着信音のようだった。

　確かにマナーモードに設定したはずなのに……というよりも、携帯の画面を見ると、マナーモードにはなっている……一体どういうことなのだろう……？

　次第に増幅していく恐怖に表情を歪ゆがませながら携帯を開くと、そこには見たくもない文字の羅ら列れつが並んでいた。

《Ｃシー太タ、学校で何してるの？》

「……！！！！」

　どういうことだ。全くの別人から、ほぼ同時刻に？

　その後メールで詳しく確認すると、親の車で通り過ぎた際、学校の近くでオレを見たということだった。すぐに通り過ぎてしまったが、それは確かにオレに見えたということだった。

　２人が２人とも嘘をついているとも考えられない。

　見間違い？

　それとも……、

　――本当に目撃している？

　気分が悪くなりながらも外に出る。

一体何だって言うんだよ！

何が起こってるんだ！

記憶の中で、Ａエー弥ヤが口こう角かくの片方を少しだけ吊つり上げている表情が浮かぶ。

確か、あれは、ドッペルゲンガー？

「ドイツ語で、「二重の歩く者」って意味なんだけどね、言葉の通り、特定の人物が同時刻に全く別の場所で現れる……ようはニセモノが出てくるっていう、超常現象の事だよ」

でもこれは、Ｂビー子コの噂うわさ話ばなし。それに、Ａ弥はこれまで決してオレの事を噂にしなかったじゃないか！

「この超常現象は全世界各地で目撃談が語られている、有名なものだよ。リンカーンや、芥あくた川がわ龍りゅう之の介すけも体験したなんて言われている。よく言われる補足情報としては、ニセモノは本人に関係がある場所で目撃される、ニセモノは周囲の人間とは一切会話をしない……そして、本人がニセモノと出会うと……本人が殺されてしまうってね……」

殺される？

もしかして……すべて、Ａ弥がやっている……？

「窓まど際ぎわの女性」の話もそうだし、「ドッペルゲンガー」の話もそう、そもそも、こっくりさんをしようと言い出したのも、Ａ弥じゃないか。

昨日も、こちらに気がついていたのだとしたら？

いや、これまでだって、Ａ弥は気がついて、それでもずっと放置

してきたとしたら？

　監視していると思っていたオレが、逆に掌てのひらの上で遊ばれていたとしたら……？

　いや、そんな事……そんな事、あるわけない！

　ホントに？　確かめよう。

　オレは、Ａ弥の家に向かうため歩き出そうとした。

　□□♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪!!

　その時、またしても携帯が不ふ吉きつな声を上げる。

　今度は着信を知らせる音だった。

　次から次へとなんだっていうんだ!?

　恐怖から苛いら立だちへと変わる感情。

　画面を見ると、同じ学年の男子からの着信だった。

　彼はよくＡエー弥ヤにつき纏まとい、噂うわさ話ばなしを手に入れてはその噂を拡げるようなやつだった。

　オレはまたしても頭を混乱させながら、電話を取る。

「……もしもし？」

『おーい！　Ｃシー太タ！　こっちこっち！　後ろー……！』

　━ブツ！

　電話はそこで突然切れた。

後ろを振り向いても誰もいない。

後ろ……？　どういう事だ？

□□♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪!!

その同級生から再度電話が掛かってくる。

「……はい」

『おい～！　切るなよ～！』

「いや……それより……」

『ああ、今さ、ショッピングモールにいるだろ？　今オレもいるんだけどさ、さっきお前見たから、電話したんだよ』

「……なんで？」

『いや、ちょっと離れてたしさ』

「……違う、なんで、オレだと、思ったんだ？」

『……え？』

「後ろ姿だったんだろ？　人違いかもしれないじゃないか」

『いやいや～！　あれは間違いなくお前だって！』

「だから、なんでそう言える……！」

『――あのキモい人形だって付いてたぜ？』

—ブツ！

電話が再ふたたびそこで切れる。

今度は再度掛かってこない。

……キモい人形？

確かにあいつは事あるごとにオレに絡んでは、バッグに付いている人形のことをキモいキモいと笑いながらいじっていた。

でも、それを見た？

オレ以外に付けてるやつを……？

いい加か減げんにしろよ。ショッピングモールって言ってたな。

見つけ出してやる。犯人がいるなら見つけ出してやる。

ドッペルゲンガーと本人が会ったら死ぬというなら、先に殺してやる！

オレはＡエー弥ヤの家へと向かおうとしていたが、方向を変えショッピングモールへと向かう事にした。

*

ショッピングモールに着いたオレは、あたりを隈くま無く探した。

カフェやショップ、中央広場など、いろいろな所を見て回る。

しかし、どこにもそれらしき人物は居なかった。

疲労のためか寝不足からか、立ちくらみがしたため、一旦ベンチに座る。

「……Ｃシー太タ？」

「……！」

　そこには、先ほどオレに電話を掛けてきた同級生が居た。

「なんだよー！　やっぱり居るんじゃんかー！」

「……ちが」

「さっきは突然電話切れるし、その後は繋つながんないしで、気き味み悪かったんだからなー」

「……ごめん……、ちょっと今気分悪……」

「──そういえば、Ａ弥とは一緒じゃないの？」

「……え？」

　今、なんて言った？

「ん？　さっきＡ弥もちらっと見た気がしたんだけど……これは気のせいかな？　あ、あと他にもなんと……に会った………」

　……Ａエー弥ヤが居た？　このショッピングモールに？

　オレは混乱のあまり、彼のその後の会話を聞き取る事が出来なかった。

　………………………………………………やっぱり……Ａ弥が？

「…………いや、オレは今日はひとりで居たんだ」

　オレは笑顔でそう言って、その場から立ち去った。

＊

　公園で休んだ後、オレは家へと帰っていた。

　Ａ弥が「キツネ」である可能性があるのなら、すぐに問い詰めることも可能だろうが、まずは証拠を掴つかまないといけないと思ったのだ。

　そのためには、本格的にＡ弥を監視する必要がある。

　家でならそれが可能だ。すでにカメラに気がつき、回収されている可能性もあるが、それ以外にも盗とう聴ちよう器きもある。

　こんなクソッタレたゲーム、終わりにしてやるんだ……！

　家へと帰る途中、先ほどツイッターで目撃報告があった神社の近くを通る。

　少しだけ調べて見ようと中に入ってみるが、特にこれと言って変な所は無かった。

　外に出ようと出口の方を見ると、そこにはよく見た人ひと影かげが立っていた。

　□□Ｄデイー音ネだ。

「……Ｄ音ちゃん？」

　オレはいつものように笑顔を浮かべ、声を掛ける。

　Ｄ音は少しだけ公園の中に入ってくる。

「……Ｃシー太タさん、どうしたんですか？」

「……ううん、なんでも……ない……」

「……？」

「……変な事聞くけどさ……今日、『オレ』に会ったり……してないよね？」

「……？　今会った……だけですけど……？」

「…………そうだよね……」

　オレはその答えを聞いて、さらに続ける。

「……みんな、おかしくなってるんだよ……」

「……どうしたんですか？　さっき会ったＢビー子コちゃんもですが……いつもと違う……まるで、ニセモノみたいですよ？」

　ニセモノ……オレの……ニセモノ。

　今日動き回っている「オレ」は一体なんなんだろう？

　これも「終しゆう焉えんゲーム」と関係があるのか？

　そして、ニセモノと一緒に居たかもしれない、Ａエー弥ヤは……。

　自分の表情が曇っていくのを感じる。

「……ニセモノ……か……」

「……本当に大丈夫ですか？」

「……うん……大丈夫……って言いたいけど、ね」

「……そう、ですよね……」

　しばらくの沈黙。

「……Ｃ太さんは、『キツネ』は誰だと思います、か？」

「…………分からない……」

「私は、Ｂ子ちゃんに、裏うら切ぎり者ものなんじゃないかって……そう言われました……」

「……Ｂ子が……？」

「……はい……」

「無理もないよ……今の状況は、誰だって不安だ……オレだってＤ音が『キツネ』かもしれないって思うし、そんな事を言うＢ子だって怪しく思う……Ａ弥だって分からない……」

　本当に、「キツネ」の正体は一体誰なんだ……？

　Ａ弥の部屋に映った、あの誰かが犯人？　それとも、Ａ弥自身が「キツネ」で、他の誰かと協力している……？

　もしＡ弥が「キツネ」だとしたら、オレは……このゲームを終わらせることができるのだろうか……？

「……でも、もし、もしも、だよ？　Ｄ音ちゃんが『キツネ』の正体を突き止めて、このゲームを終わらせる事が出来るようになったら……躊ちゆう躇ちよせず、ひと思いに終わらせてほしい」

　Ｄ音はしばらくの沈黙の後に、ゆっくりと答えた。

「…………はい」

　これから、オレは、このゲームを終わらせるために行動する。

　もしオレが駄目な時は、Ｄ音も動かないと殺される。

　Ｄ音も、きっと、何かに気がついている。

　オレ達はそれ以上の言葉を交かわさずに、神社から離れていった。

　──早く、このゲームを、終わらせないと。

影踏みゲンガーⅣ　Correct Answer

　オレは家に着くと、バッグの中から「手紙」を取り出した。

　何が書いてあっても決心を変えない。そう心に決めて、ゆっくりと「手紙」を開く。

　──ドッペルゲンガー　制作者：Ｃシー太タ──

　ドッペルゲンガーには遭そう遇ぐうするな

「手紙」の中にはただそれだけが書かれていた。

　これが何かの注意であっても、今のオレはこのゲームを終わらせる方を優先させると決めていた。

　オレはＰＣの電源を立ち上げる。

　いつものようにＡエー弥ヤの部屋を監視するためだ。

　オペレーションソフトの起動アクションが終わった後、すぐにオレはウインドウを立ち上げる。

　そこにはいつもと同じようにＡ弥の部屋が映し出される……、

　──はずだった。

「……!?」

　そこには、これまで以上に現実離れした映像が映し出されてい

た。

　Ａ弥の部屋、Ａ弥の机の前に……、

―オレの後ろ姿が映っていた。

　自分の後ろ姿ほど、自分で見る事の無いものは無いが、すぐにこれが自分だと気がつく。

　カメラ越しのオレのバッグには、「やる気きへの木きさん」の人形も付けられている。

　自分の部屋のバッグを確認すると、そこに、先ほどまでは確かに付いていたはずの人形が無かった。

　Ａ弥はよく机に座っているが、オレの背中が邪魔で確認することは出来ない。

　そして、よく見ると、オレの手には、ハサミが握られていた。

「…………Ａエー弥ヤああああ！！！」

　オレは部屋を飛び出し、Ａ弥の家へと向かっていた。

　もしかしたらＡ弥が犯人かもしれない？　これが罠わなかもしれない？

　……違う！　今なら分かる。

　犯人は、オレの考えが合っていれば、「キツネ」はきっと……！

「Ａ弥ぁ！」

オレはＡ弥の家のドアに手を掛ける。

──ガチャ！　ガチャガチャガチャ!!

鍵かぎが掛けられているようだった。

オレは昔から変わらない合あい鍵かぎの隠し場所から鍵を取ると、ドアを開け、中に入った。

「Ａ弥ああ！　どこだ!?」

家の中に入ると、各部屋を確認しながら進む。

走って来たのに、汗が流れてこない。極度の精神状態のためなのだろうか？　疲労や恐怖も感じない。あるのはただの、使命感とでもいうような感情だった。

台所にはなぜかカッターナイフが置かれていた。

オレはそれを手に取ると、カチカチカチと刃はを出して手に握った。

そのままＡ弥の部屋へと向かう。

ごくりと唾つばを飲み込むと、カッターナイフを握り直し、オレはドアを勢いよく開けた。

──バタン！

……誰もいない。

先ほどまでカメラに確かに映っていたオレのニセモノも、そして、Ａ弥も居ない。

　どこだ？　一体どこに行った!?

　オレは部屋の中を隅々まで探してやろうと思い、部屋の中へと足を踏み入れる。

　□□♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪!!

「……!?」

　その時だった、突とつ如じよ携帯が大音量で鳴り響いた。

　驚きで一瞬体が硬直するが、すぐに携帯を開く。

　そこにはメールが届いていた。

「……これは……！」

　メールの本文に目を通す。その内容に頭が混乱するが、すぐに異常な感覚を覚える。

　──確かに誰も居ないはずの部屋に、気け配はいを感じたのだ。

　オレは慌てて振り返る。

「……！！！！」

オレの背後に現れた光景、そして、このメールで、オレは、すべてを理解した。

　いや、理解は出来ていないが、納得をせざるを得ない状況だった。

「×××の正体は、や×ぱ×キ×××××た」

　──そう言って、最期にオレはクスリと笑った。

CHAPTER3
背徳Byebコール

制作者:B子

背徳ＢｙｅｂコールI　□ノイズ・ノイズ・ノイズー

「あんたの幼おさな馴な染じみ！　ホントどうにかなんないの!?」

　──私は今、怒っていた。

　木造二階建ての旧校舎、その二階にある元音楽室に怒ど号ごうが鳴り響く。

　怒号の主はもちろん私だ。

「ああ、あの噂うわさ？　傑けつ作さくだよね？」

　ニッコリと笑顔を浮かべながら茶ちゃ化かすように答えるのはＣシー太タ。

　色しき素そが薄くやわらかそうな猫毛に、人の良さそうな垂たれ目めをしていて、一般的にはイケメンと言われるような容姿だ。私は、どちらかというと苦手だ。

「……あんたねえ……」

　Ｃ太に詰め寄ってやろうとしたところで、再ふたたび教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　□□Ａエー弥ヤだ。

「やあじゃないわよ……あんたの悪あく趣しゅ味みはいいけどさ、人のことネタにするのなんてやめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

私は怒いかりを必死に抑おさえながらも、Ａ弥に睨にらみ寄っていく。

怒っているのは、おそらくＡ弥が流したであろう、噂話についてだった。

その噂というのが、私のニセモノが徘はい徊かいしているというのだ。

確実にこいつが流したであろう噂に毎度の事ながら腹を立てるが、これまた毎度のことながら悪びれる様子もないＡ弥の表情に、怒っているこっちが大人げない気分になってくる。

「……はあ……もう慣れたからいいけどさ……」

私は溜ため息いきを吐つき、席に座り直した。

「……ところで、噂で流れていた、ドッペルゲンガーって、なんなんですか？」

Ｄデイー音ネが質問する。

「……ああ」

Ａ弥が口こう角かくの片方を少しだけ吊つり上げてそれに答える。

「ドイツ語で、「二重の歩く者」って意味なんだけどね、言葉の通り、特定の人物が同時刻に全く別の場所で現れる……ようはニセモノが出てくるっていう、超常現象の事だよ」

ニセモノ……ね。

私みたいに人の顔色を窺うかがって生きてるタイプの人間に、そう言った噂うわさは酷いと思う。

まあ、この手の噂話も初めてではないから、特にショックも受けないんだけど……。

まあ、とにかく、私達はこのようにして、いつも「噂話」を収集

する活動をしている。

　最初はＡエー弥ヤを問い詰めているうちにだったし、これ以上変な噂を流さないようにという監視のためだったが、そのうちある事に気づいた。

　私はどうやら、オカルトの類たぐいの話が好きなようだった。

　人生において何かに熱中するという事が無かった私だが、オカルト話を聞いていると胸の奥がワクワクとうずくのを感じていた。

　この学校に過去実際に起こった、生徒変死事件を聞いた時には、不ふ謹きん慎しんにも恐怖とともに興味がわき、その二つの感情は私の肌を粟あわ立だたせた。

「……そういえば、他にもこんな噂、知ってる？　最近知った話なんだけどね、『笑う自殺者』っていう都市伝説があるんだ」

　Ａ弥が再ふたたび収集した噂話を嬉き々きとして語り始めた。

　外は日が傾いてきたのか、夕焼けが真っ赤に空を染める。

　綺き麗れいだけれども、不ふ吉きつな色だな、そんな事を思いながら、私は話を聞いていた。

「あ、そろそろオレは帰ろうかな」

　しばらく時間が経たった後、Ｃシー太タがそう言ってバッグを取った。

　バッグに付いている変な人形が揺れる。

　エノキがシャキーン！というポーズをとっているのだが、そのエノキの顔がやる気がなさそうで絶妙に可愛かわいくない。

　ちなみに名前は「やる気きへの木きさん」というよく分からない当て字になっているそうだ。

「私もそろそろ……って、やっぱり、その人形、気になるわ」

　私はＣ太のバッグに付いている人形を指先で弾はじきながらそう言った。

「えー、可愛いのになあ？　Ｄデイー音ネちゃんも、そう思うでしょ？」

「いいえ、微み塵じんも可愛いとは思いませんよ？」

　Ｄ音はにっこりと笑ってそう言った。

　Ｃ太はそれでも笑顔を崩くずさず、

「あはは、Ｄ音ちゃんらしい言い方だなあ」

　と答えた。

「……人形といえば、都市伝説の『ひとりかくれんぼ』でも、人形を使うんだよね」

　Ａエー弥ヤも今日は帰るようで、バッグを手に取っている。その間も都市伝説の話をしていた。

＊

　翌日、私は今日もまた、怒っていた。

　昨日あれだけ言ったにも関わらず、噂うわさがさらに酷くなっていたのだ。

　中には私のニセモノを目撃したなんて人まで出てきた。

　悪質にもほどがある。今日という今日こそＡ弥を殴ってやらないと気が済まないかもしれない。

　放課後になり、Ｄデイー音ネと合流すると旧校舎のドアを勢いよく開ける。

「……おや？　今日もずいぶんとお怒いかりだね？」

　Ｃシー太タだ、今日もニッコリと笑って何も知らないような振りをしている。

　絶対に私が怒っている理由も分かっているだろうに、とぼけているのだ。

「……あんたの幼おさな馴な染じみは、やっぱりどうにかならないの？」

　私とＤ音は荷物を置きつつ、なんとなくいつもこのあたりという席に座った。

「ああ、あの噂？　傑けつ作さくだよね？　相変わらず最高だよ」

　……本当こいつ！　私みたいに他の人には外そと面づらいいくせに、絶対性格悪い！

「……あんたねえ……」

　思わず立ち上がろうとしたところで、再ふたたび教室のドアの開く音が聞こえた。

「……やあ」

　□□Ａ弥だ。

「やあじゃないわよ……あんたの悪あく趣しゅ味みはいいけどさ、人のことネタにするの、いい加か減げんやめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……昨日に引き続き、しらばっくれてんじゃないわよ。噂が悪化してるじゃないの」

　私は怒いかりを必死に抑おさえていた。

「ほうら、火のない所には煙が立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗談を言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶然誰かが見たら、きっとニセモノだと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「……それはそうと、最近少し気になっていることがあるんだ」

　Ａエー弥ヤは唐突に話を切り替えると、そこから最近身の回りに起こっている不可思議な現象について話し始めた、そして、「終シユウ焉エンノ栞シオリ」に関する話をすると、最後にこう言った。

「……もう一度やろうよ」

　そうして、私達は、最悪の終焉ゲームに、巻き込まれる事になる……。

*

　──ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

　Ｃシー太タがようやく声を絞り出そうとしたところで、再ふたたび激しいノイズ。

　画面上に映る男の顔がこの世のものではないかのように歪ゆがみ、笑い顔と困り顔と泣き顔と怒り顔とを行き来する。

　──そして訪れる静寂。

「……な、なんなんですか……い、今の……？」

「……分からない」

「……『キツネ？』『裏うら切ぎり者もの』だって……？」

「……た、質たちの悪い冗談でしょ……？」

「…………」

　一同は沈黙し、お互いを見た。

　薄暗い部屋の中、誰もが青白い顔をしていたと思う。

　そこからかなり長い時間……実際には一分にも満たなかったかもしれないが……沈黙は続いた。そして誰かの「……とりあえず今日は帰ろう……」という声に促うながされるまま、私達は学校を後にした。

*

　私は家に帰ってからも、ずっと震ふるえが止まらなかった。心拍も早く、呼吸も浅い。

　あの声が、ずっと耳の奥で聞こえているようで、恐怖が込み上げてくる。

「……助けてよぉ……」

　私は小声でアイツの名前を呼びながら、携帯を握りしめる。

　何度も電話を掛けようと思うも、勇気を出す事が出来なかった。

　……そうして私は、ただ嗚お咽えつを漏らしながら、夜が過ぎるのを待つのだった。

背徳ＢｙｅｂコールII　□クビツリ注意報ー

　翌日、私は朝早くから学校へと向かっていた。

　とにかくひとりでは恐怖が込み上げてしまい、我慢が出来なかったからだ。

　学校へと足早に向かい校舎の中に入ろうとしたところで、靴箱の前に知った顔を見かけた。

　□□Ｄデイー音ネだ。

　私は状況を共有できる人が見つけられた事に安あん堵どし、声を掛けようとする。

「……Ｄ□□」

　声を掛けようとしたその時、Ｄ音の近くにもうひとりが居る事に気がついた。

　……あれは、Ｄ音のクラスメイトの女子、確か陸上部に所属していて、クラスでもいつも中心にいるような女の子だ。

　私も廊ろう下かですれ違うと挨あい拶さつをする程度には仲が良かった。

　一体、彼女がＤデイー音ネと何を話しているのだろう……？

　私は、ちょうど二人から死角になるよう隠れながら、声が聞こえるところまで近づく。

「……んだ…………ね、…………るから……もこれ位くらい…………………」

「……そう……私…………………」

　上手く会話を聞き取る事が出来ない。何やらＤ音は周まわりをかなり気にしているようだ。

　私は息を殺しながら、二人の様子を窺うかがう。

　するとＤ音が、唐突に靴箱を開けた。

「……っ！」

　私は思わず漏れそうになる声を自分の手で押さえる。

　遠くからで、しかも一瞬だったので確かではないが、見間違いでなければそこにはあって欲しくない物が存在していた。

　それは、一通の手紙だった。

　一瞬だけでも嫌な雰ふん囲い気きが伝わってくる、明らかに普通でないその手紙。

　私の位置からはＤ音の表情が見えないが、どうして彼女の靴箱にそれがあるのだろう？

　私は口を手で押さえたまま、もう一度会話を聞くために身を乗り出す。

　すると、いつの間にかその手紙は陸上部の女の子の手に渡っていた。

私はあの不ぶ気き味みなアナウンサーの声を思い出す。

・こっくりさんのお願いは手紙で届く。

・こっくりさんのお願いを遂すい行こうする猶ゆう予よは一週間とする。

・お願いが訊きけない場合には死ぬ。

・指示の遂行を放ほう棄きした場合にも死ぬ。

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られた場合には、知ったその者が死ぬ。

まさか、Ｄ音！　そんな！　このままなわけないよね!?

Ｄ音の所に手紙がもし来たんだとしたら、その内容を見られたら、死んじゃうんだよ？

Ｄ音がそんなことするわけない……！

するわけないよね！

私の心の声など全く届かないように、陸上部の女の子は手紙を開けようとする。

その手の動きがまるでスローモーションのように見える。

駄目だよ……。でも……そんな事……！

「……………………………………………………………………………………なによこれ？」

「──っ！」

　陸上部の女の子の顔が一瞬だけこちらを向く。

　そこには一切の感情も無く、生気も無く、目には光が無かった……！

　あまりにも恐おそろしいその顔に、私は泣きそうになってしまう。

　──一体あの「手紙」には、何が書かれているっていうの？

　その後、陸上部の女の子は手紙を持ったまま、ブツブツと何かを呟つぶやいて校舎の中へと歩いていく。

　私はただ恐怖のあまりその場から動けなくなってしまった。

　Ｄデイー音ネもその場に立ち尽くしていたが、しばらくすると校舎の中へと消えていった。

　私はその日は授業を受ける気にもなれず、新校舎の屋上で膝ひざを抱えながらただただ時間が経たつのを待っていた。

＊

　そして放課後、私は恐怖を感じながらも、旧校舎の元音楽室へと足を運んだ。

　早く来すぎたのだろう、旧校舎の中には誰もいなかった。

　Ａエー弥ヤが来たら、今朝の事を、相談するべきだろうか……？

　でも、あの「手紙」がまだ本物と決まったわけではないんだ。

私はどうしたら、いいんだろう……？

そんな事を考えていると突とつ如じよ教室のドアが開いた。

──ガラッ。

「…………！」

それは、Ａエー弥ヤとＣシー太タだった。私はＤデイー音ネと２人きりにならなかった事に安あん堵どを覚えていた。

「……どうしたの？　Ｂビー子コちゃん」

「…………」

「……Ｂ子？」

「……き、昨日のって………………い、悪戯いたずらだよ……ね……？」

そうだ、昨日の事だって、もしかしたら悪戯かもしれないのだった。

しかし、Ａ弥やＣ太の表情から、２人の考えも伝わってきた。

あれが、もしすべて本当だとしたら、この後……きっと……。

「……っ」

──ガラッ。

「…………！」

私がＤ音の事を口に出そうとしたところで、教室のドアが開き、Ｄ音が現れる。

私は思わず怖くなってしまい、Ｄ音から目を逸そらし黙り込む。

「……結局、昨日のって……なんだったんでしょうね？」

　Ｄ音は私のその反応に気がついていないのか、会話に入ってきた。

「……今の段階では分からない……ただの手の込んだ悪戯いたずらだって可能性もあると思う……悔しいけど……」

　悪戯、というＡ弥の言葉に少しだけ安堵し、顔を上げる。

「……でも、もし本当だとしたら、この中にひとり……」

　この中にひとり、裏うら切ぎり者ものがいる。

「──やめて！」

　私はその言葉を遮さえぎるように叫さけび、耳を塞ふさぐようにして頭を抱える。

　そんな言葉聞きたくない。だって、まだ、そんな事分からないじゃない。

　もし、もしもあの陸上部の女の子が死ぬような事があったら……？

　そんな事あるわけない！　人がそんなに簡単に死んだり殺されたりなんて、そんな非現実的なことなんて、そうそう起こるわけ──！

　──ダン！！！！

　突とつ如じよもの凄すごい音が鳴ると、私達のいる旧校舎の音楽

室の窓ガラスに巨大な影が現れた。

　──それは、人ひと影かげだった。

「きゃあああああああああ！！！」

　私は叫び、そして一瞬遅れて理解する。私が想像していた全ての悪い事が、それよりもさらに酷い現実として染み出していく感覚に目眩めまいを覚えていた。

　──人影は、あの、陸上部の女の子だった。

　私は恐怖のあまり、その人影から目を離す事が出来なくなってしまった。

　彼女は今、二階の空中に浮いて、教室の中を覗のぞき込むような形になっている。

　屋上から伸びているロープが、彼女の首を支え、虚うつろな目と目が合う。

「……ま、『窓まど際ぎわの女性』だ……」

　Ａエー弥ヤが恐怖に引きつった半笑いの表情のまま震ふるえている。

「……だ、誰か……呼ばなきゃ……」

　Ｃシー太タも怯おびえている。

　でも分かってない。私は、私は、私の恐怖はあなた達には一切分からない……!!

　……Ｄデイー音ネ……!!

・お願いの内容を部外者に見られたり、知られたりした場合には、知ったその者が死ぬ。

　このゲームは本物だ。

　どんなに非現実的であろうと、すべてがリアルなんだ。

　私はすっかり目の前の、この、虚ろな目から目が離せず、その時のＤ音の表情を、見る事が出来なかった。

　その後、私の記憶は途と切ぎれ途切れになっていた。

　しばらくすると、どこからか先生たちがやってきて、その後警察などに軽く事情を話したところで私達は早く帰るようにと解放された。

　警察の断片的な情報と、後に聞いた話では、今回の事件は明らかに不明な点が多いのだそうだ。

　それはそうだろう、これは、この殺人は……。

＊

　私が家に着き、自分の部屋に入ると、ちょうど携帯が震ふるえた。

　それは仲のいいクラスメイトからの携帯チャットだった。

《Ｂビー子コ、大丈夫？　ビックリしたよね？》

　どうやら彼女は誰かから私が自殺現場を目撃したと聞いたようだ。

心配して、チャットしてきてくれたようだ。

　私はベッドに腰掛けて、携帯に文字を入力していく。

《……うん、ごめん、まだちょっとショックが強くて……》

　心配して連絡してきてくれた友人には悪いが、今は長時間会話をする気分ではなかった。

《そっかぁ、ごめんね、でも元気だしてね》

《うん、ありがとう》

《見てた他の２人もそうだけど、あんまり気を落としすぎないでね……》

　……２人？　どういうこと？　あの時旧校舎には私の他に３人が居たのに。

《……２人って、どういうこと？》

《え？　ああ……いつも４人で居るのはなんとなく知ってたから》

《え？　ごめん、だからどういうこと？》

《だって、その時、Ｃシー太夕くん別のところに居たよ？》

　…………どういうこと？

《いつも４人だから、きっとＢ子入れて、３人だったんだろうなって》

《……そっか》

《……？　うん、ほんとに大丈夫？　何かして欲しい事があったらいつでも言ってね？》

《……う、うん、ありがとう》

《それじゃあね》

　私は携帯電話を置いてしばらく考える。

　Ｃ太が、他の所にいた？

　彼女の見間違いの可能性もあるが、一体……どういうことなんだろう？

『──ひとりの裏うら切ぎり者もの『キツネ』によってゲームは始まった』

　裏切り者はひとり。

　Ｄデイー音ネがもし、本当にただ手紙を届けられただけだったとしたら……？

　でも、手紙の内容を知られたら何かが起こると言われていて、Ｄ音は簡単にそれを見せるだろうか？

　私は考えれば考えるほど思考の泥どろ沼ぬまに足を踏み入れていっていた。

　もがけどばもがくほど深みに嵌はまっていく考えは、もうすでに理路整然とはほど遠い状態になっていた。

　気がつけばカーテン越しに朝日が差し込んできていた。

　私は混乱と恐怖と不安とで、今までに感じたことが無いほどの疲労を感じていた。

……ねえ、助けてよぉ……。

　考えているのかもいないのかも分からなくなった私はついに、子どものようにそう呟つぶやきながら、アイツの携帯番号を鳴らした……。

背徳ＢｙｅｂコールIII　名も無い噂うわさー

『……もしもし？』

　いつもと変わらないその声を聞いた瞬間、私は一気に、せき止めていた感情が流れ出してしまった。

「……Ａエー弥ヤぁ……」

　私は物心ついてから、ほとんど初めて人に泣き声を聞かせたと思う。

　今はその恥ずかしさを感じている余裕などなかった。

「……助けて……」

　私は自分の知りうる限りの情報をＡ弥に伝えた。

　Ｄデイー音ネに手紙が届いていたこと、Ｃシー太タが目撃されていること……。

　Ａ弥は私の嗚お咽えつ交じりの声にも特に何も言わず、ただただいつも通りに話を聞いていた。

　そして私がすべての話をし終わると、しばらくの沈黙の後、こう言った。

『……この事件は、あり得ない事だらけだ……』

　Ａエー弥ヤの声には少しの怒いかりが含まれているように聞こえた。

『僕の話した都市伝説をことごとく利用してる。「笑う自殺者」「窓まど際ぎわの女性」……Ｃシー太タのは、「ドッペルゲンガー」かな？』

「……どういうこと？」

『……この世にあるのは、「真実っぽい」ものと、「嘘っぽい」ものだけだ』

「……え？」

『実際にそれを「映像」にしないとダメだなんて、二流脚本家だよ』

「……Ａ弥？　どういう……こと？」

　電話越しで表情が見えてこなかったが、そこでようやく、Ａ弥が笑っている事に気がついた。

『……こんなゲーム、終わらせてやろう……』

　Ａ弥の力強い声に、私の恐怖心は吹き飛んでしまったような気がした。

　終わらせる？　でも？　どうやって？

・ゲームの終しゅう焉えんを迎えるには「キツネ」を殺せ。

　もしかして、と思った私の考えを読み取ったかのようにＡ弥は続ける。

『……こんなゲームのルール、理り不ふ尽じんすぎる。まだ分からないけど、そもそも、本当に「キツネ」が僕たち４人の中にいるのかすら怪しいって僕は思ってる』

「……え？」

『……絶対に、このゲームのルール以外で、犯人を追いつめる方法があるはずだ』

「……追いつめる……方法？」

　私にとってそれは、思いも寄らない話だった。

　そもそも、私はこの４人の中に「キツネ」がいるという事を疑う事すらしなかったし、今でもまだ疑っている……。

「……でも、どうやってそれを調べれば……」

『……僕は、十年前の事件が怪しいと思ってる。あの事件をもっと調べれば、何か分かるかもしれない』

「……十年前の、あの事件……」

『……そもそも日記だって、何かがおかしいんだ……それさえ分かればあるいは……』

　Ａエー弥ヤはブツブツと呟つぶやきながら何かを考えている。

　……私は、私は一体どうすればいいんだろう……。

　ただ膝ひざを抱えて、Ａ弥が解決してくれるのを待てばいいのだろうか……？

　そんなのは……そんなのは嫌だ。でも、私なんかが役に立つわけもない……。

　そんな事を考えながらいると、Ａ弥がこう言った。

『……一緒に調べよう』

「……え？」

『十年前の事件について、一緒に調べよう……』

「……でも……」

『ひとりじゃどうにもならないかもしれない……手伝ってくれよ。そして、こんなゲーム、終わらせてやろう……！』

　私はその言葉が、嬉しいなと、こんな状況でもそう思った。

　　　＊

「……ふう……」

　電話を終えると、私は久しぶりにシャワーを浴びていた。

　体にまとわりついていたかのような不安が少しは流れ、気が紛れるように感じた。

　そして、先ほどＡエー弥ヤと話した内容を確認する。

　私達は図書館を手分けして探すという事を決めた。

　十年前の事件について、もっと詳細な情報を集めるため、当時の新聞記事などを調べようということになったのだ。

　まずはどういう情報を集めるべきか、軽く話し合いをする事にした。

　この近辺にある図書館は２つ、学校内の図書室と市立図書館だ。

　そのちょうど中間くらいにショッピングモールが存在する。

　そこにこれから集合し、話し合いの後それぞれの図書館に向かう。

　シャワーから出て着替えると、ショッピングモールへと向かった。

　外に出ると湿度が高く、早足に歩くと、うっすらと汗をかくほどだった。

　ショッピングモールの近くに来ると、そこには数人の知り合いを見つけることが出来た。

　中には恐おそらくカップルだろうという男女も見える。

　私はなんとなく身を隠しながら待ち合わせの指定場所へと向かった。

　待ち合わせの場所に着くと、電源の切れた状態の携帯電話を取り出した。

今朝また、クラスメイトや仲の良い友達から私を心配してのチャットやメール、リプライやＤＭダイレクトメッセージが飛んで来ていたのだ。

　結構多くの通知が来るので、待ち合わせ場所に着くまでは電源は切っていた。

　私はＡ弥からの電話だけでも受けられるようにと、再度電源を入れた。

「……えっ」

　そこには、あり得ないほど大量の、新着通知が表示されていた。

　クラスメイトからのメールもあるが、なぜかツイッターのＤＭが、知らないＩＤから届いていたのだ。

　謎の鍵かぎアカウント「ｍｅａｒｒｙ１７１３」。

　フォローしていないとＤＭは届かないのに……覚えのないそのアカウントはフォロー１フォロワー１……つまり、私としか繋つながっていなかった。

　私は恐おそる恐るそのうちのひとつを開く。

『わたし、いつも貴方を見てるの』

　……なんだっていうの……？

　身の回りに降り掛かる、理解不能な現象に律りち儀ぎに怯おびえながらも、今までのようにパニックに陥る事は少なくなっていた。

　それよりも早く、このゲームを終わらせることを考えていた。

　Ａエー弥ヤは、まだなんだろうか……！

「……っ！」

　顔を少し上げてあたりを見回そうとしたその時だった、私は感情の籠こもった視線を感じた。

　勘違いではない、今のは確実に、私の事を見ていた。

　その視線に気がついていない振りをしながら、そちらの方を振り向いてみる。

「！」

　――一瞬だが、そこには、Ｄデイー音ネが居たような気がした。

　Ａ弥はわからないと言ったが、もし、Ｄ音が「キツネ」だとしたら……？

　携帯が再度震ふるえ、ＤＭダイレクトメッセージが来た事を告げる。

　私はゆっくりとそれを開いた。

『今も見てるの』

「……Ｂビー子コ……？」

「……！」

　私が視線を感じた方向を確認しようとした瞬間、唐突に、少し離れたところから声を掛けられた。……それは、Ａ弥だった。

　私は先ほど感じた視線が、もうすでに感じられなくなっていた事に気がつくと、Ａ弥の近くへと駆かけ寄った。

「……どうしたの？」

「……ううん、なんでもない……」

「……そう」

　Ａ弥はうなずくと、それ以上は追求してこなかった。

「ところでどうしよっか？　どこかに入る？」

「いや、歩きながら話そう。基本的な事は簡単だよ、十年前のちょうど今くらいの季節。その頃の地方新聞なんかを調べたいんだ。何か少しでも事件の詳細……たとえば死因とか、発見された時の事が分かると嬉しい」

「……うん」

「僕は学校の図書館に向かおうと思う、Ｂビー子コは、市内の図書館に向かって欲しい」

「……分かった」

「終わったら、手掛かりの有無に限らず、一度合流しよう」

「うん……！」

　──いろいろ考えるのはやめだ、とにかく今は、出来る事をやるしかない……！

　Ａエー弥ヤと別れた後、私もすぐに市立図書館へ向かおうとした。

　しかし、ショッピングモールから出ようとしたところで、私は同級生に見つかり、声を掛けられてしまった。

「Ｂ子ちゃん！」

高く澄すんで、良く通る声。

　振り返ると、彼はＡ弥のクラスメイトだった。

　明あかるく社交性の高い性格をしていて、Ａ弥いわく、よく噂うわさを拡げてくれるやつ。

　私は彼の事がちょっとだけ苦手だった。

「Ｂ子ちゃん、昨日は大変だったね……もう大丈夫なの？」

「……あ、うん、大丈夫だよ」

　私はこんな時ですら自分の仮面を外す事ができず、外面のいい笑顔を浮かべたまま答えてしまう。

「いや、ほんと、心配したんだよー」

　彼は心にも無いような事をひたすら何度も繰り返す。

　私はそろそろ立ち去らなきゃと思い、話を中断しようとする。

「……あ、私、そろそろ……」

「──そういえば、Ｃシー太タが変なんだよ」

　……え？

「……変……って？」

「うん、今日見かけたからさ、思わず後ろから電話したんだよ。ちょっと離れてたし。そしたら、Ｃ太、変な反応して電話切っちゃったんだよね」

「……それって、ほんとに……？」

「だってあのキモい人形まで持ってたんだぜ？」

Ｃシー太タの……ニセモノ？

私はがんばって思考を巡めぐらせる。

もし、もしもＣ太のニセモノが居るとしたら？

私達４人の中に裏うら切ぎり者ものが居て、私達４人の中に裏切り者が居ないという事にも繋つながってくる……？

そして、それはＤデイー音ネだってニセモノが居るかもしれない。

私が見て、私を追いかけているＤ音もニセモノだとしたらどうだろう？

『──ひとりの裏切り者『キツネ』によってゲームは始まった』

まだ、まだ何かが上手く当て嵌はままらない。

私は会話を適当に切り上げると、Ｃ太、もしくはＤ音のニセモノを探しつつ、ショッピングモールを一度探索してから市立図書館へと向かった。

背徳ＢｙｅｂコールⅣ　□シークレットミッション Ｓｉｄｅ Ｂ□

　市立図書館に着く頃にはすっかり昼過ぎになっていた。予想以上にショッピングモールで時間を取られてしまったようだ。早く、早く十年前の事を調べないと。

　図書館は学区から少し外れたところにあった。小さめな図書館な事もあり、職員はカウンターにひとりいるだけで、他に利用者は居ないようだった。

　私は奥にある資料コーナーへと向かう、ここには、古い本や広辞苑よりも大きいような専門書、さらに独自にまとめられた資料などがファイリングされている。

　大きな本が多いので私は目的の資料を探すのに手間取ってしまう。

　いくつかの棚を見て回った後、ふと、奥にある小さな机の上に出しっ放しにされている本に気がついた。

　誰かが見た後にそのまま置いていったのだろうか？

　そう思い、軽い気持ちで表紙を覗のぞく。

　……それは、真っ黒な本で、黒猫が描いてある栞しおりが挟はさまっていた。

「……っ！」

　今までで一番不ふ吉きつな感情を覚える。

　心臓が鐘を打つようにドクドクと響き、呼吸が自分の耳元で聞こ

えているかのように大きくなる。

　私が近くにあった本棚にもたれ掛かると、上から何かが落ちてきた。

　……それは、一通の手紙だった。

　私は見たくない逃げ出してしまいたい気持ちと懸けん命めいに戦いながら、このゲームを終わらせるためにと、その手紙をゆっくりと開いた。

　━メリーさんからのお願い　制作者：Ｂビー子コ━

　メリーさんからの電話に出るな。

　その手紙を見た瞬間、携帯が震ふるえた。

「……っ！」

　私は思わず叫さけびそうになる声を必死で抑おさえると、携帯の画面を確認した。

　それは、先ほどのアカウントからのＤＭダイレクトメッセージのようだった。

　電話で無い事に少しだけ安心した私は、そのＤＭを開く。

『さっきはショッピングモールに居たの』

……え？

私がそのＤＭを見てるとすぐに次のメッセージが届いた。

『───今はもう、図書館の前に居るの』

□□！！！！！！！！

その時だ、ちょうど図書館の中に誰かが入って来た音が聞こえた。

私は近くの本棚の裏に隠れて息を潜ひそめる。

この数日間で、私は何度恐怖に追いつめられて来たか分からない。

でもその中でも、確実に、リアリティのある恐怖が、一歩そしてまた一歩と近づいて来ていた。

図書館に入って来た誰かは、迷う事なく、こちらの資料コーナーへと近づいて来た。

そこでしばらくの間本棚を見た後、いくつかの資料を持って机へと向かったようだ。

恐怖に耐えながら、その姿を後ろから覗のぞき込む。

─それは、Ｄデイー音ネだった。

「…………だ……」

　背後からで表情が見えないが、彼女も何かの資料を探している。

　やっぱり、彼女が「キツネ」……？　十年前の資料を、隠そうと、している……？

　そんな事……、そんな事無いよね……!?　Ｄ音……！

　私は、ゆっくりとゆっくりと彼女の背後に近づく。

　Ｄ音は資料に夢中で一切気がついていないようだった。

　意を決して、願いを込めて、私は彼女の、肩を叩たたいた。

　━トン

「……ひっ！」

　突然肩を叩かれたことに驚いて、Ｄ音が振り返る。

　近くに来た事で分かったが、やはり彼女が調べていたのは、十年前の、あの事件のようだ。

　Ｄ音はそれを体で隠すように、少し前まえ屈かがみになった。

「……ど、どうしたのですか……？　こんなとこ━」

「何してるの？」

「……え？」

「さっきから、何をしてるのって聞いてるの」

「……」

　私は、嫌けん悪お感かんと絶望感を隠す事が出来ていなかったと

思う。

「……あは、どうしたんですか？　Ｂビー子コちゃん何か怒って—」

　Ｄ音はそれでもとぼけようとしてくる。

「さっきも！　ショッピングモールで誰かを探してたよね？」

「……え？」

「私のこと……？　ここにだって、先回りしようとして？」

「Ｂビー子コちゃん、何を言っているのか……」

　私は何を言っているのだろう、これじゃまるで、Ｄデイー音ネの事を—。

「私、見てたの！」

「……え？」

「…………あの日、靴箱の所で……」

　これを言ったらもう戻れない。

　そう思いながら、それでも私は、自分自身を止める事が出来なかった。

「あなたが『手紙』を見せたところ……あなたが彼女を殺したんでしょ！」

「……ち、違う……の……」

「もうやだもうやめてよ！　『キツネ』だって、もしかしたらＤ音じゃないかって、私、そうだとしたら、そうだとしたらもう……こんな悪夢終わらせてよ……！」

私は混乱のあまり取り乱してしまっていた。

「……Ｂ子ちゃん、違うんです……私は……」

　何かを言おうとして、Ｄ音は黙り込んでしまった。

　しばらくの沈黙が続く。私はこのままここで殺されたって構かまわないと思っていた。

　しかし、次にＤ音から告げられた言葉は、思いもよらないものだった。

「……Ｂ子ちゃん」

「……な、何よ……」

「私が、Ｂ子ちゃんの事好きだって言ったの……」

「……え？」

　そういってＤ音はいつもと変わらない、笑顔を浮かべた。

「……嘘じゃないですからね？　……あれ」

　立ち尽くす私の横を通り抜け、Ｄ音は市立図書館を後にした。

　私はＤ音が立ち去ってからも、しばらくの間ただ呆ぼう然ぜんとその場に立ち尽くしていた……。

＊

　私は今、後悔していた。

もし、もしもＤデイー音ネが「キツネ」じゃないとしたら、私は本当に酷い事を言ってしまったかもしれない。

「……早く、こんなゲーム、終わらせないと」

　私は立ち上がり、Ｄ音が広げていた資料の近くまでやって来た。

　ここからは先ほど「終焉オワリノ本ホン」が置かれていた机を見る事が出来るが、それはすでに跡形もなく、消え去っていた。……もう、何が起こっても動じない。

　私は、Ｄ音が調べていた資料に目を通す。

　そこには、十年前に学校で起こった、変死事件の詳細が書かれていた。

　映画研究会の生徒４名が変死。

　部活動中に事故か？　事件の可能性も。

　……映画研究会？

　おかしい、十年前の日記には、そんなこと書かれていなかった。

　彼らは私たちと同じ、オカルト研究会のような集まりだったはず……なら、一体……。

　私は他にも詳しい記事が無いか調べる。

　いくつかの記事を読み比べていると、その表記の仕方がおかしい事に気がついた。

　ほとんどの記事で、死因などの表記が無いのだ。詳しい事は分かっておらず……。と書かれており、それ以降は忘れ去られたかのように、パッタリと記事が掲載されていない。

私はまず、Ａエー弥ヤにこのことを伝えなければと思い、携帯を取り出した。

しかし、何度発信のボタンを押しても、機械的な音声で電波状況の悪さを伝えられるだけだった。

私は、居ても立っても居られなくなり、そこにある資料を持って図書館を出る。

学校にとにかく向かわなくちゃ、そう思ったところで、またしても携帯が震ふるえた。

Ａ弥からの折り返しかと思い画面を見ると、それは、Ｄ音からのメールだった。

メールの本文には、ただ、こう、書かれていた。

『Re：今から自分が裏切り者じゃないことを、証明してみせます』

……Ｄ音……！

私は嫌な予感がしていた。

あの子がもし、本当に裏切り者じゃないなら、あの子の元にも、手紙が届いていたとしたら。あの子が、私に言った事が……嘘じゃないなら……!!

──私は、学校に向かおうとしていたその向きを変え、必死に走りだそうとする。

しかしその瞬間、またしても携帯が震ふるえた。

私は急いで携帯の画面を確認する……それは＊＊からの着信だっ

た。

『不在着信が一件あります』

　画面を見つめて、一つ息を吐く。同時に携帯電話がまた震えだした。

　その振動とは関係なしに指が震えた、

「×××の正体は、や×ぱ×キ×××たんだ」

　──そう言って、最期に私はクスリと笑った。

CHAPTER4

正夢モンキーハンド

制作者：A弥

正夢モンキーハンドI　負け犬至上主義ー

　夢だ、これは、少し前に見た、夢の話だ。

　子どもの頃、なりたかったものになれるという夢。

　僕は、その夢の中で、ヒーローになっていた。

　子どもらしい夢でしょ？

　でも、昔からちょっとひねくれていたと思うのは、それは、ニヒルなヒーローなんだ。

　頭脳派で、数多の秘密を持っている。

　いわゆる、ダークヒーロってやつ。

　決め台詞ぜりふはこう。

「僕が解いてあげるよ」

　颯さつ爽そうと現れて、謎を解き、悪を倒す！

かっこいいでしょ？

……でも、現実世界ではそうも行かない。

僕はその夢を見た日、遅刻をしてしまった。

ヒーローどころか、劣等生でしかない。

時々、こういう事があると、考えるんだ。

この世界は、誰かが見ている夢で、その中で僕は、ただのモブキャラに過ぎないんじゃないかってね。

だから、主人公にはなれない。よって、ヒーローでもない。

まあ別に、ヒーローに憧れるような年齢でも無くなったし、いいんだけどね。

それどころか、僕は成長とともに、そのひねくれているというか、変化球的な部分を増幅させていった。その結果として、噂うわさ話ばなしだとか、オカルトだとか、そういうものに興味がある偏屈な高校生になってしまった。

まあとにかく、これは夢の話。

夢はいつか、醒さめるもの……。

＊

木造二階建ての旧校舎、その二階にある元音楽室に向かって僕は歩いていた。

授業中、先生の目を盗んで眠っていたため、少し頭がボーッとしている。

昨日も、都市伝説に関するサイトを見たり、資料を読んだりしていたのだ。

僕は少しだけ息を吐はくと、教室のドアを開けた。

「……やあ」

──教室には僕以外の３人がもうすでに揃そろっていた。

「やあじゃないわよ……あんたの悪あく趣しゅ味みはいいけどさ、人のことネタにするのなんてやめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……しらばっくれてんじゃないわよ」

Ｂビー子コが睨にらみ寄ってくる。

怒っているのは、おそらく僕が流したであろう、噂話についてだった。

全く、何度も何度も流されているのに、相変わらず怒ってくるんだな。

「……はあ……もう慣れたからいいけどさ……」

しばらくＢビー子コは僕を睨にらみつけていたが、僕があまりにも無反応にしていたためか、溜ため息いきを吐つき、席に座り直した。

「……ところで、噂うわさで流れていた、ドッペルゲンガーって、なんなんですか？」

Ｄデイー音ネが質問してくる。

「……ああ」

僕は得意顔でそれに答えた。

僕達はこのようにして、いつも「噂話」を収集する活動をしている。

　一見バラバラでまとまりがなく、自分とは相あい容いれないような人間である彼らだが、ひとつだけ共通点がある。

　──それは、彼らもまた、極度の噂話好きだということだった。

　噂……といってもその内容はほとんどがオカルトや都市伝説に分類されるものだ。

　やれ「口くち裂さけ女おんな」だの、「人じん面めん犬けん」だの……。

　そういった噂話を語り合ってるうちに、次第にこの旧校舎へと集まるようになった。

　部活でも同好会でもなく、ただ単に集まって話すだけ。

　日にちが決められているわけでも、ノルマがあるわけでもない。

　仲がいいわけでもなんでもなく集まるというのは周まわりからすると気き味みが悪いと思われるかもしれないが、少なくとも自分にとってみれば余計な関心がない分、居心地が良かった。

「……そういえば、他にもこんな噂、知ってる？　最近知った話なんだけどね、『笑う自殺者』っていう都市伝説があるんだ」

　僕は再ふたたび収集した噂話を語り始めた。

＊

「あ、そろそろオレは帰ろうかな」

　しばらく時間が経たった後、Ｃシー太タがそう言ってバッグを

取った。

「私もそろそろ……って、やっぱり、その人形、気になるわ」

　Ｂ子はＣ太のバッグに付いている人形を指先で弾はじきながらそう言った。

　Ｃ太は昔から、人とは可愛かわいいという感覚がずれているように思う。

「えー、可愛いのになあ？　Ｄ音ちゃんも、そう思うでしょ？」

「いいえ、微み塵じんも可愛いとは思いませんよ？」

　Ｄ音はにっこりと笑ってそう言った。

　Ｃシー太タはそれでも笑顔を崩くずさず、

「あはは、Ｄデイー音ネちゃんらしい言い方だなあ」

　と答えた。

「……人形といえば、都市伝説の『ひとりかくれんぼ』でも、人形を使うんだよね」

　僕はバッグを手に取りながら、ポツリと呟つぶやいた。

「ひとりかくれんぼ？」

　その呟きが聞こえていたようで、Ｃ太が反応する。

「うん、人形かぬいぐるみを使った、降こう霊れい術じゆつみたいなものの一種かな。最終的にはそれを切り刻きざまなきゃいけないんだけどね」

「……ふーん、あ、ぬいぐるみといえばオレはＡエー弥ヤとの小さい頃の事を思い出すな」

「……ん？」

　Ｃ太がさらに続ける。

「ううん。ただ、もし『ひとりかくれんぼ』をやるにしても、あの

ぬいぐるみは、使わないで欲しいなって」

「……なんのこと？」

「なんでもないよ」

　Ｃ太は僕に笑顔を投げかけると、そのまま会話を有う耶や無む耶やに流した。

　　　＊

　翌日、僕は今日もまた、寝不足の不機嫌さを引きずったまま、旧校舎へとやって来た。

「……やあ」

　今日も僕以外の３人はすでに揃そろっていた。

「やあじゃないわよ……あんたの悪あく趣しゅ味みはいいけどさ、人のことネタにするの、いい加か減げんやめてくれる？」

「……なんのことかな？」

「……昨日に引き続き、しらばっくれてんじゃないわよ。噂うわさが悪化してるじゃないの」

　Ｂビー子コは怒いかりをあらわにしながら、立ち上がろうとする。

「ほうら、火のない所には煙が立たない。僕はちょっとしたおふざけで冗談を言っただけじゃないか」

「……あんたねえ」

「今の君を偶然誰かが見たら、きっとニセモノだと思うんじゃないかな？」

「マジでもういい加減に……！」

「……それはそうと、最近少し気になっていることがあるんだ」

　僕は話を切り替えると、そこから最近身の回りに起こっている不可思議な現象について話し始めた。

　最近、僕の身には確かにおかしなことが起こっている。

　誰かからの視線を常に感じる事もそうだし、何か、常に既き視し感かんのようなものを感じるのだ。

　なんだったら、この会話ですら、僕は何度目かの会話のように思えている。

　これも、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』のせいなのだろうか？

　とにかく僕は、先日行ったこっくりさんの話をした後、最後にこう言った。

「……もう一度やろうよ」

　そうして、僕達は、最悪の終焉ゲームに、巻き込まれる事になる……。

＊

　──ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

　Ｃシー太タがようやく声を絞り出そうとしたところで、再ふたたび激しいノイズ。

　画面上に映る男の顔がこの世のものではないかのように歪ゆがみ、笑い顔と困り顔と泣き顔と怒り顔とを行き来する。

──そして訪れる静寂。

「……な、なんなんですか……い、今の……？」

「……わからない」

「……『キツネ？』『裏うら切ぎり者もの』だって……？」

「……た、質たちの悪い冗談でしょ……？」

「…………」

一同は沈黙し、お互いを見た。

薄暗い部屋の中、誰もが青白い顔をしていたと思う。

そこからかなり長い時間……実際には一分にも満たなかったかもしれないが……沈黙は続いた。そして誰かの「……とりあえず今日は帰ろう……」という声に促うながされるまま、僕達は学校を後にした。

結局僕はＣシー太タと一緒に帰ったが、ひと言も話す事は無かった。

家に帰ると、いつも以上に視線を感じるような気がしていた。

僕はすぐさま部屋に入ると、胎たい児じのように膝ひざを抱え、震ふるえながら布団ふとんに潜もぐり込んだ。

そうすると、逆に視線が近く感じるような気がして、何度も布団を出ては周まわりを確認したり、テレビをつけたり消したりの繰り返しをしていた。

──結局、気がつくと朝になっていた。

*

　翌日、僕は授業が終わった後、Ｃ太と合流し、旧校舎へと足を運んだ。

　そこにはすでにＢビー子コが待っていた。

「…………！」

　Ｂ子はこちらを見ると、何かを言いたそうに口を開いた。

「……どうしたの？　Ｂ子ちゃん」

「…………」

「……Ｂ子？」

「……き、昨日のって………………い、悪戯いたずらだよ……ね……？」

　Ｂ子の動揺が激しかった。

　そして、昨日の事は悪戯と言えるだろうか。確かに実現不可能ではないが、しかしそれには相当な準備がいるはずだ……。

「……っ」

　──ガラッ。

「…………！」

　Ｂ子が何かを言おうとしたところで、教室のドアが開き、Ｄディー音ネが現れる。

　一瞬Ｂ子はＤ音を見たが、目を逸そらすと黙り込んでしまった。

「……結局、昨日のって……なんだったんでしょうね？」

　Ｄ音は気がついていないのか、会話に入ってきた。

僕は今の自分の考えを言葉にする。

「……今の段階では分からない……ただの手の込んだ悪戯だって可能性もあると思う……悔しいけど……」

僕の言葉を聞いて、Ｂ子が顔を上げる。

「……でも、もし本当だとしたら、この中にひとり……」

「──やめて！」

Ｂビー子コは突然叫さけび、耳を塞ふさぐようにして頭を抱える。

そして、その瞬間だった──、

──ダン！！！！

突とつ如じよもの凄すごい音が鳴ると、僕たちのいる旧校舎の音楽室の窓ガラスに巨大な影かげが現れた。

──それは、人ひと影かげだった。

「きゃあああああああああ！！！」

一瞬だけ遅れてＢ子の叫び声が聞こえる。

僕はあまりの出来事に驚き、座り込んでしまった。

人影は今、二階の空中に浮いて、教室の中を覗のぞき込むような形になっている。

屋上から伸びているロープが、その首を支えていた。

「……ま、『窓まど際ぎわの女性』だ……」

僕は自分が言った事が現実に染み出てきたような恐怖を感じた。

恐怖のあまり、なんとも言えない表情に歪ゆがんでしまう。

「……だ、誰か……呼ばなきゃ……」

Ｃシー太タがそう言って動き出そうとした。

しかし、明らかにもう手遅れであるという事は誰の目にも明らかだ。

結局の所、Ｃ太もそう言ったきりで、何も動く事は出来なかった。

しばらくすると、どこからか先生達がやってきて、その後警察などに軽く事情を話したところで僕達は早く帰るようにと解放された。

警察の断片的な情報と、後に聞いた話では、今回の事件は明らかに不明な点が多いのだそうだ。

現実で起こり得ない事件。

恐怖と驚きよう愕がくで回転していない頭だったが、現実では起こり得ない事が起こっているという矛む盾じゅんが、何かの糸口を告げているように感じていた。

「……そんなこと、あり得ない……」

……僕はそう呟つぶやいた。

正夢モンキーハンドII　□シークレットミッション Ｓｉｄｅ Ａ□

　家に帰ると、ようやく現実を理解し始めてきたのか、思考がまとまっていくのを感じる。

　今まで恐怖だと思っていたものは、驚きよう愕がくが加えられたもので、純粋な恐怖ではない。

　確かに初めて目の前で見た死体は、あの目は、今思い出しても身み震ぶるいがするが、それよりも大きな違和感が僕の中にわだかまっていた。

　いつものように机に座ると、携帯を取り出し、メール作成画面を呼び出す。

　ずっと変わらない癖くせ。

　送信する事は無く、ただ下書きに自分の考えをまとめていく。

　こっくりさんの後に起こったあの放送。

　そして、僕が話した都市伝説を再現したようなあの事件。

　どう考えたって、あまりにもよく出来すぎている。

　僕は夢中になって携帯を打ち込んでいく。

　謎を握る鍵かぎは、「終焉オワリノ本ホン」「終シユウ焉エンノ栞シオリ」そして、「キツネ」の存在……。

必死で携帯を打ち込んでいると、ふと、首筋に冷たい刃は物ものを当てられたような悪お寒かんを感じた。

「……っ！」

　慌てて振り返る。

　しかしそこには当然、何も無かった。

　僕はしばらくの間、気け配はいがした方を見つめる。

　ずっと感じる視線は、この既き視し感かんは。

　誰かに見られているとか、そういうレベルの話ではないのではないだろうか……？

　一点をただ見つめながら僕は思考の迷路に迷い込む。

　どう考えればいいのだろう……。

　この問いに、正答など、あるのだろうか……？

僕はしばらくの間考えていたが、これ以上の結論には辿たどり着けないと思い、考える事をやめた。

その後、念のため部屋の中をぐるりと見回すと、そのままベッドに潜もぐり込み膝ひざを抱えるようにして眠った。

*

「……もしもし？」

翌日の早朝、思いがけない人物から電話が掛かってきた。

僕はいつも通りの声で不機嫌そうに電話に出た。

『……Ａエー弥ヤぁ……』

Ｂビー子コだった、Ｂ子の声はいつも学校で聞く声とあまりにも違っていたので、一瞬驚いてしまう。

いつも通りとは言ったが、よく考えるとＢ子と電話で話すのはほとんどこれが初めてのような気がした。……Ｂ子は、どうやら、泣いているようだった。

『……助けて……』

僕はＢビー子コの話を、ただいつも通りに聞いていた。

Ｄデイー音ネに手紙が届いていたこと、Ｃシー太タのニセモノが目撃されていること……。

Ｂ子はたまに詰まりながらも、自分の知っている情報を、出来るだけ正確に伝えようとしていてくれていた。

そしてＢ子の話がすべて終わると、僕はしばらく考えた後、こう言った。

「……この事件は、あり得ない事だらけだ……」

　僕の声には、少しの怒いかりが含まれていたと思う。

「僕の話した都市伝説をことごとく利用してる。『笑う自殺者』『窓まど際ぎわの女性』……Ｃ太のは、『ドッペルゲンガー』かな？」

『……どういうこと？』

「……この世にあるのは、『真実っぽい』ものと、『嘘っぽい』ものだけだ」

『……え？』

「実際にそれを「映像」にしないとダメだなんて、二流脚本家だよ」

『……Ａエー弥ヤ？　どういう……こと？』

　僕は自分でも意識しないうちに、口こう角かくがつり上がっている事に気がついた。

「……こんなゲーム、終わらせてやろう……」

　電話越しにＢ子の狼ろう狽ばいする気け配はいを感じる。

　僕が特定の誰かを殺す、とでも考えているのだろう。

「……こんなゲームのルール、理り不ふ尽じんすぎる。まだ分からないけど、そもそも、本当に『キツネ』が僕達４人の中に居るのかすら怪しいって僕は思ってる」

『……え？』

「……絶対に、このゲームのルール以外で、犯人を追いつめる方法があるはずだ」

『……追いつめる……方法？』

　そう、何も人様の作ったルールに乗っ取って進める必要なんて無い。こんなにも都つ合ごう良く行きすぎている事が、僕には何よりもおかしく思えるのだ。

　──決定的だったのは、あの女子生徒の自殺。

　それは、このゲームのルールが絶対であるという、壮絶なデモンストレーションであって、ひとつのルールが正しいとするならば、他のすべてのルールも正しいという錯さつ覚かくを産むためのように思えた。

　ひとつのインパクトによって、他の矛む盾じゅんをかき消すなんて、そんなものは常じよう套とう手しゅ段だんだ。

『……でも、どうやってそれを調べれば……』

　そう、そこだ。僕はまだ、情報が足りない。

　絶対的な何かが、どこかに隠されているはずだ。

　そもそも、「終焉オワリノ本ホン」「終シユウ焉エンノ栞シオリ」の秘密だってそうだ……！

「……僕は、十年前の事件が怪しいと思ってる。あの事件をもっと調べれば、何か分かるかもしれない」

『……十年前の、あの事件……』

「……そもそも、日記だって、何かがおかしいんだ……違和感……そう、違和感の正体さえ分かれば……あるいは……」

　僕はブツブツと呟つぶやきながら考える。

　これは、どう考えたってひとりで実行出来る事では無かった。

　Ｂビー子コは確かに今、かなり怯おびえているだろう。

　でも、ひとりでは、このゲームを終わらせることが、出来ないか

もしれない。

「……一緒に調べよう」

『……え？』

「十年前の事件について、一緒に調べよう……」

『……でも……』

「ひとりじゃどうにもならないかもしれない……手伝ってくれよ。そして、こんなゲーム、終わらせてやろう……！」

　僕は自分に出来る限りの前向きな声を出して、Ｂ子にそう、告げた。

*

　それから僕とＢ子は図書館を手分けして探すという事を決めた。

　この近辺にある図書館は２つ、学校内の図書室と市立図書館だ。

　そのちょうど中間くらいにショッピングモールが存在する。

　そこにこれから集合し、話し合いの後それぞれの図書館に向かう。

　僕はすぐに準備をすると、家を出た。

　外に出ると湿度が高く、ジメジメとした空気が纏まとわり付いてきた。

　いつものようにひどいクマに、ボサボサの頭。

ただいつものように、うつむきがちにではなく、しっかりと前を向いて足早に歩いた。

　ショッピングモールの中に入ると、そこには挙きよ動どう不ふ審しんにキョロキョロと周まわりを気にするＢビー子コを発見することが出来た。

　物陰になるところに隠れているために、なかなか見つける事が出来なかった。

「……Ｂ子……？」

「……！」

　僕は少し離れたところから声を掛ける。

　Ｂ子はそれに気がついたようで、こちらに駆かけ寄ってきた。

「……どうしたの？」

「……ううん、なんでもない……」

「……そう」

　Ｂ子はかなり情じよう緒ちよ不ふ安あん定ていな状況にあるようだが、必死に何事も無いような振りをしている。

「ところでどうしよっか？　どこかに入る？」

「いや、歩きながら話そう。基本的な事は簡単だよ、十年前のちょうど今くらいの季節。その頃の地方新聞なんかを調べたいんだ。何か少しでも事件の詳細……たとえば死因とか、発見された時の事が分かると嬉しい」

「……うん」

「僕は学校の図書館に向かおうと思う、Ｂ子は、市内の図書館に向

かって欲しい」

「……分かった」

「終わったら、手がかりの有無に限らず、一度合流しよう」

「うん……！」

　そう言ってＢ子と別れたが、Ｂ子はかなり限界に近いようだった。

　話を聞く限りだと、Ｄデイー音ネもかなりの精神状態にあるだろう。

　そして、Ｃシー太タも、もし手紙がすでに届いているとしたら、ニセモノはその影響かもしれない。

　みんなが今どういう状況にいるとしても、僕に出来る事はただひとつだ。

　この、終しゆう焉えんゲームを、終わらせてやる……！

　──僕は、ショッピングモールから出ると、学校に向かって走り始めていた。

正夢モンキーハンドIII　どこかの噂うわさー

　学校は休校のためもあって、人の気け配はいを感じなかった。

　数日はメディアの記者やカメラマンが居たようだが現在は居なくなってしまっている。

　僕は念のため裏門から入ると、新校舎の中の職員室へと向かった。

　その時に居た教員は、僕が学校に居る事に驚いていたが、家にひとりで居たくない、などと適当な事を言ったら、状況も状況だったためか図書室の鍵かぎを貸してくれた。

　そして、新校舎の中の図書室と図書資料室に向かう。

　僕は鍵を開けると、ゆっくりと中に入り、資料室にある地方新聞などがまとめられているコーナーに向かった。

　年代別に並べられた新聞をまとめているバインダーを探す。

　新聞は全ページが保管されているわけではなく、新聞部が地方の新聞と全国の新聞から気になった記事などを切り抜いてまとめ、年代ごとに整理しているのだそうだ。

　僕はちょうど十年前のバインダーを手に取ると、近くの机の上にそれを広げながら、それらしい記事を探していった。

　しばらくページをめくっていくと、そこにそれらしい記事の一式がまとめられていた。

　学校の部活動中に事故か　４名が死亡、……１名が重体。

　……！

学校に伝わる噂話とは、さっそく食い違ってきていた。

そして、僕の持っている日記とも違う。

僕の持っている日記には、４人の登場人物しか出てこないのだ。

このもうひとりは一体……？

さらに当時の新聞部のメモだろうか、記事には鉛筆でこう書き加えられていた。

映画研究会の中で起こった猟りよう奇き殺さつ人じんか!?

映画研究会、殺人事件……ね。僕は背筋がゾクゾクとするのを感じる。

あの日記には映画研究会なんて言葉は一言も出てこなかった。

彼らは僕たちと同じ、オカルト研究会のメンバーなはずだ……。

これらの記事一式をバインダーから外すと、持ってきていたバッグにそれを詰め、バインダーは元の棚へと戻した。

……ガラッ。

「……っ！」

その時、図書室のドアが開けられる音が聞こえた。

僕は咄とつ嗟さに身を隠すと、そこには、見覚えのある人物が入り込んできた。

　……Ｄデイー音ネだ。

　しばらく息を潜ひそめていると、彼女もまた、新聞の記事などを調べ始めていた。

　僕はＢビー子コと同様に、彼女にも協力を仰あおぐべきか悩んだが、今の彼女の環境からすると、確実に「終焉オワリノ本ホン」は一度届いているだろう。

　そうすると、僕の考えが正しければこの後……！

「……！」

　一瞬Ｄ音がこちらの方を向いて立ち上がった。

　僕はそのまま息を潜め隠れていると、Ｄ音は諦あきらめたのか、図書室から出て行った。

「……ふう……」

　僕は大きく溜ため息いきを吐つく。

　しかし、こうもしていられない。僕の予想が正しければ、Ｄ音はこの後、「手紙」に書いてある事を実行しようとするだろう。

　僕はとにかく今はＢ子に連絡を取らなければと思い、座ったまま携帯を取り出す。

　しかし、いくらＢ子に電話をしても、電波が届かない状態で全く繋つながる気け配はいが無かった。

　……しまった。

このままだと危険だ。

　僕はまずは学校を出て行動を起こそうと、立ち上がった。

　そして先ほどまで僕が資料を広げていた机を見ると、そこに、あるはずのないものが、堂々と置かれていた。

　真っ黒な表紙。そして、猫の栞しおり。

　まるで先ほどまで僕がそこで読書をしていたかのように、その本は置かれていた。

　……ついに、来た……！

　──「終焉オワリノ本ホン」と「終シユウ焉エンノ栞シオリ」。

「──本当にあったんだ」

　この時、僕は一体どのような顔をしていただろう。

　何度も見たいと思っていたこの本と栞しおりが、今、目の前に存在している。

　その普通ではない雰ふん囲い気きに、理解や感情を超えて飲み込まれてしまいそうだった。

　……さすがに、体が震ふるえている。

　僕は、本をしまうため、バッグを開けた。

　しかしそこには、先ほどまでは確実に存在しなかったものが、存在していた。

「……っ！」

　一通の手紙と──小さな手のミイラのようなもの。

　手首から上だけのそれは、指が五本しっかりとついていて、半開きの状態だった。

　大きさとしては小学生の子ども位くらいの手のように見える。

　かなりグロテスクな外見だ。

　……これは、一体……⁉

　僕は手紙をバッグから取り出すと、ゆっくりと開く。

　そこには、ただ、こう書かれていた。

　──猿さるの手　制作者：Ａエー弥ヤ──

　猿の手を使って、運命に抗あらがえ

　……猿の手か……確か、海外の小説に出てきた事がある、アイテムだ……。

　願い事を、その指の数だけ、叶かなえてくれるというアイテムだったはず。

――もし、これが本当に、なんでも願いが叶かなうなら……！

「キツネの正体は、やっぱりキミだったんだ」

　――そう言って、最期に僕はクスリと笑った。

正夢モンキーハンドⅣ　□リピートラジディーー

　━━これもまた、ひとつの結末。

　帰結していない、重なりあった可能性。

　終焉ゲームの、ひとつの正体。

　……このゲームは、お互いの猜さい疑ぎ心しんを高めるための、仕掛けでしかなかった。

　この中にひとり、「裏うら切ぎり者もの」がいる。

　その言葉とともに繰り広げられる、非現実的な惨劇。

　次は私が殺されるんじゃないか？

　あいつが怪しい！　あいつが裏切り者だ！

　そうやって広がった負の感情は、やがて「キツネ」を殺す事を肯定する。

　殺さないと、殺される……！

　そう思い込んだ人間は、愚おろかだ。

　　　　＊

学校から出た僕は、自分の家へと戻りつつ、Ｂビー子コの携帯へと連絡を続けていた。

　何度も何度もコールする。

　十数回目のリダイヤルの後、ようやくＢ子は電話に出た。しかし、その時、僕は予想していた最悪の出来事が現実のものになったんだと、思い知る。

『……もしもし』

「もしもし！　Ｂ子？」

『………………』

「……Ｂ子……？」

『……Ｂ子ちゃんは……』

「……！　Ｄデイー音ネ……？」

『Ｂ子ちゃんが、私の事を「キツネ」だって……』

「Ｄ音、一回落ち着こう……」

『Ｂ子ちゃんが、私の事、いきなり襲って……もしかして、助けようと……して……？』

「……！」

『私が……私が……やっぱり……「キツネ」なのかも……だったら……』

「Ｄ音……？」

　──ブチッ！

その言葉を最後に、電話が切れる。

　Ｂ子は、Ｄ音が手紙に書かれている事を実行しようとしている事を知り、そしてそれを止めに向かったんだ……。

　そして、Ｄ音は……！

　……こんなの、こんな事……！

　僕は自分の選択が悪あく手しゅだった事を思い知らされる。

　胃液が込み上げてきて、吐はきそうな気分になりながらも、僕はＣシー太タへと電話を掛けた。

　……出ない。

　嫌な予感がする。

　僕はＣシー太タに「話したい事があるから、僕の家の前で待っててくれないか」とメールをして、家へと急いだ。

　そして、家へと着いたが、家の前にはＣ太は居なかった。

　しかし、玄関のドアに手を掛けたところで、中から物音が聞こえた。

　玄関のドアに手を掛けると、鍵かぎが開いている。

　僕は、ゆっくりと物音を立てないようにしながらも、家の中へと入っていく。

物音は、僕の部屋からしているようだった。

僕は恐おそる恐る部屋に近づきながら、最後の祈りを胸に、Ｃ太にメールを打つ。

『Ｃ太？　僕の部屋に、居ないよね？』

送信完了の画面に切り替わった直後の事だ、僕の部屋からはメールの着信を知らせる音が鳴った。

やっぱり、Ｃ太がそこに居るんだ。

僕はゆっくりと部屋の中を覗のぞき込む。

その瞬間、Ｃ太が、カッターナイフを持ったまま、僕に襲おそい掛かってきた。

「キツネの正体は、やっぱりキミだったんだ」

Ｃ太は最期にそう言うと、クスリと笑った。

＊

──僕はしばらくの間、真っ赤に染まったその部屋の中、涙と、嘔吐と、嗚咽と、あらゆる体液を撒き散らしながら、ただ呆然としていた。

手には部屋と同じ色をしたハサミが握られており、目の前には、小さい頃から一緒にいた、Ｃ太が寝転がっている。

　僕が、僕が……。

　そして物語は帰結する。

　いつもと同じ、在あり来きたりな「結末」へと向けて。

CHAPTER5
報復ヒーローズ

誰も居ないはずの校舎に足音が響いた。

木造の床がギシギシと不快な音を立てる。

外はもうすっかり暗くなっている。

ポチャンと、どこかの蛇じや口ぐちから、水が滴したたり落ちる音が聞こえた。

そして、風が窓をカタカタと揺らす。

いつもと一緒。

変わらない、何度も見た結末。

ＤデイーＤ音ネはＢビー子コを殺した。

その後にＤ音も死んだ。

そしてＡエー弥ヤはＣシー太タを殺した。

最後に、Ａ弥はここで自殺する。

誰も残らない。

また今回も、誰も残らない。

これで、今回の話も終わり。

ゲームオーバー。

　あーあ、またやっちゃった。

　つまんないつまんないつまんないつまんない。

　Ｂ級のオチはもういいんだよ。

　ほら、さっさと終わりにしようぜ。

　何度やっても同じ。

　心のどこかであり得るはずの無いイレギュラーを願った。

　この使い古し極々ありふれた、つまらないパラレルワールドに逃げた話の「結末」が。

　──そうして、「いつも通り」旧校舎の元音楽室の、ドアを開けた…………。

□□!?

　自分の目の前に広がった光景が理解出来ずにいた。

　旧校舎の元音楽室には、Ａエー弥ヤのみならず、死んでいるはずのＢビー子コやＣシー太タ、Ｄデイー音ネまでもが揃そろっている。いつも学校で集まるように、いつもの制服で、いつも通りに……！

　そして、みんなが自分の方を指差していた。

　……これは一体、どういう事だ？

「……ようやく、このゲームの仕組みが分かった」

　Ａ弥が告げる。

「このゲームは、クリア不可能なゲームだったんだ。最初からおかしいとは思ってた、こんな事、あり得ないってね」

「そう」

　そしてＢ子が続ける。

「例えばあの、こっくりさんの後のアナウンサーの声。あれに関しては悪戯いたずらの可能性も否定できない。「現実」でも実現可能だから……」

　……！

「次は、あのクラスメイトの首つり事件です」

　Ｄ音がさらに突きつける。

「これはあり得ない事件です……でも、これも、完全に不可能という訳ではないです……」

　Ｃ太もさらに続けた。

「でも、あまりにも演出過剰だった……まるで、＊＊の世界の出来事のように」

　……だから、それがどうしたって言うんだ……！

「なんで僕らが生きているのか？　そういう顔をしているんだろうね。Ｄ音、Ｂ子、Ｃ太が死に、そして僕がここで死ぬはずじゃないかって……。でも、さっきまで君が見ていた「それ」は、あり得たかもしれない一つの結末。けど今回は違う。確かに、可能性の世界では、僕らは死んでいて、かつ、生きている状態だった。まるで、シュレディンガーの猫のような言い方だね……。君が観測して、初めて結末が収束する。でもそんな事はあり得ないんだよ……。もしかしたら、水槽脳仮説にも近いかもしれないね。この世界は──」

　Ａ弥はそのまま語り続けた。

「でも、確かに僕らは居る。そしてこの世界に「現実」は存在しているんだ」

　Ａエー弥ヤはそういうと、ポケットの中から、小さなミイラの手首を取り出した。

　それは、指が一本も折れていない元のままの姿だった。

「僕が解いてあげるよ」

……！

「この『猿さるの手』は、あまりにも夢のようなアイテムだ」

Ａ弥は『終焉オワリノ本ホン』を持ったまま、ミイラの手首を掲げ、続ける。

「見ての通り僕はこの『猿の手』を一度も使ってはいない。もちろんこれがどういう物なのかは知っているよ。夢のようなアイテムではあるけど、これを使って０から１を生み出すことができる訳ではなく、これに願ったモノと同等の価値を失い『それ』をもらえる条件を作り出す、又は誰かの所有物を『どこか』から引っ張ってくる。猿の手にお金が欲しいと願った夫婦の息子が、翌日、仕事中に亡くなりそのおかげで願った通りの金額が会社から払われたなんて話が一番ポピュラーかな？　もし仮に僕が自動販売機の前で、ジュースが欲しいと願ったらその自動販売機の中にあるジュースが１本無くなる代わりに、僕の財布からお金が無くなるのかな？　でもそんなもの、僕がお金を入れて、ボタンを押すだけの事でいいんだ」

Ａ弥は「猿の手」を置くと、さらに続ける。

「お願いの中身は重要じゃない。要は、「猿の手」なんて必要ないって事さえわかればいいんだ……」

……な、何を言っているんだ……？

「君が見てきたのは、在あり来きたりなバッドエンド。醒さめない悪夢さ」

確信じみた目で、追いつめるような目で……！

「もっと簡単に言うと、ＣＤのジャケットになんて書いてあったとしても、誰かが聴くまではどんなジャンルの音楽が入っているか分からない。クラシックの可能性もロックの可能性もジャズの可能性も等しくある……。もちろん空っぽで無音の可能性だって……。それは晩ご飯の献立も映画館のポップコーンの味もその映画の内容だって全て同じことで傍観者、観測者、劇場の観客、読者がいて結果となる。つまり、結果を知っているのは参加者と、その目撃者だ。だけど、目撃者は常に先入観というものを持っている。もしかしてこうなるんじゃないか、きっとこうだろう……とかね。一度頭の中に浮かんでしまった映像からは逃れられない。キミの頭の中にも流れてなかったかい？　僕たちのバッドエンドが……」

　Ａエー弥ヤはそういうと、スッと腕を上げこう言った。

「決定的だったのは、黒幕からの命題だよ。この中に裏うら切ぎり者もの……「キツネ」がいるってね。何かの本で、読んだんだ。どんなに荒こう唐とう無む稽けいな選択肢であっても、全ての可能性を考えた上で、それしか残らないのだとしたら、疑うべくもなく、それが真実だってね。つまり、「キツネ」以外の全ての人間を排除すれば、残った人間こそが「キツネ」に他ならない……。僕はね、正直、少し疑っていたんだよ、この中に一人の……「この中」の定義をね……。勝手にこの４人しかいないと思い込んでいた。だけどね、よく考えたら違ったんだよ」

　新聞の切り抜きが投げられる。

「間接的にだけど、気付いたのは、十年前に起こったとされるこの事件だ。４人が死亡、そして１人が重体……。これはまったく直接的な証拠ではない。けれど、調べれば調べるほど、終焉ゲームとこの事件とは重なる部分が多い。まるで、この事件を参考にゲームが

作られているみたいにね。だから、僕らと唯一違うこのもう１人の存在が、４人以外の他の誰かの可能性を僕に示してくれたんだ」

「だから、Ａ弥はまず私に伝えたの。「キツネ」は４人以外だって。そして、Ｄデイー音ネの所に向かってくれってね」

　Ｂビー子コがそう言う。

「それから、オレにも同じメールをして、家に来ていたオレと合流した……」

　Ｃシー太タがＡ弥を見て微笑ほほえむ。

「私は私が「キツネ」じゃ無い事を知っています。そして、それは、４人とも同じ……」

　Ｄ音がＢ子を見てさらに続ける……！

「…………だったら、あの場にいたのは、あのこっくりさんを「見ていた」のは、必然的に、このことを知っている人物だけ。……ねえ、「キミ」はあのこっくりさんを、見ていたし、知っているし、ずっと一緒にいたでしょ？　だって、そうじゃないと、知り得ないもんね？　ルールでは４人の中にキツネがいるだなんて一言も言っていなかった。ただ、僕達全員が４人の中に犯人がいるだと勝手に思い込んでいたんだ。キミも含めて。……もう、第４の壁は……平面だからこそ使えるトリックは破られたんだよ。もしも「猿さるの手」が願いを本当に叶かなえるというなら、こんなゲーム、そしてこんなにもくだらない茶番は終わりにしよう」

『終焉オワリノ本ホン』は破りさられた。そして、人差し指をこちらに向けると、口元を歪ゆがませながら、こう、宣告したのだ。

「さっきも言った通り、どんなにあり得ないことでも、全ての可能性を考えた上で、これしか残らない。そして、目には見えず本人が一番に除外してしまう可能性……」

Ａエー弥ヤは息を飲んだ。そして、こう告げた──。

「今回の終焉ゲームの「キツネ」は……キミだ！」

「……そして、これもまたバッドエンドなのかもしれないね。参加者には──」

　そこから何も耳に入ってこなくなった。ぐらりと揺れる視界、体勢を変えたところで違和感に気がつく。

　ポケットの中に、一通の「手紙」が入っていたのだ。

　ゆっくりとそれを開ける。

　そこには、ただ簡潔に、こう、書かれていた……。

——夢の結末　制作者：＊＊＊＊——
次のページを捲るな。

『夢と違う事するなよ……』

誰も居ない館内にブザー音と音声が響く。

『以上を持ちまして猟りよう奇き的ハイスクールライフ「終シユウ焉エンノ栞シオリー命題編ー』の公演を終了いたします』

CHAPTER6
終焉リヴァイバル

消毒液の匂いが鼻をつく。

　体中に繫つながれた線を通じて、液体が流れ込んで来る。

　生きている？　生かされている？

　真っ白な真っ白な世界。定期的に聞こえるリズムが、ただでさえ眠い意識をさらに睡眠状態へと誘う。

　人間は、ただ白い部屋に入れられただけで、気が狂ってしまうものらしい。

　だとしたら、もう既すでに狂っているんだろうな……。

　そもそも、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』ってなんだったのか……。

　今はもう、遠い昔の事過ぎて思い出せないが、後悔の感情だけが、心を抉えぐる。

　それにしても、あんな解答で、満足出来る訳ないじゃないか。

　まったくもって、バカバカしい。

　定期的に聞こえるリズムに、エコーが掛かり始める。

　ああ、またしても始まってしまうんだろう……。

　　　＊

「Ｅイー記キ！　じゃあなー！」

「また明日な、Ｅ記！」

放課後、クラスメイトたちが部活だのなんだのに向かう中、オレは帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。

　廊ろう下かですれ違うたび、オレの名前を呼んで来るクラスメイト達。

　そのひとつひとつに挨あい拶さつを返しながら、オレは目的の場所へと向かっていた。

　老朽化が進む、二階建ての木造建築物。その二階にある、ひとつの部室が、オレの目的の場所だった。

　──そうして、オレは『いつも通り』音楽室の、ドアをあけた。

「ウィーッス！」

　──自己分析をもって、百点の点数をつけることのできる回答が、人にはそれぞれあるのだそうだ。

　オレ、Ｅ記にとって、そんな自己分析の回答は「元気！」だろう。

　というか、自己分析じゃなくてもそうだと言える。

　見た目からただよう元気オーラがやばい。

　オレはとにかく、元気だけが取り柄の男だった。

「お、Ｅイー記キ～おっつー！」

　オレの名前を呼びながら軽く手を挙げるのは、Ａエー乃ノ。

少し焼けた肌、動きやすいようにと短くされたスカートの下には体操用のスパッツを履いており、短く切きり揃そろえた髪型からも、爽やかで快活そうな印象を受ける。

　実はレトロゲームが好きらしいのだが、そんな印象は全くなく、なんというか全体的に、スピード派です！　という雰ふん囲い気きの漂う女子生徒で、その軽量そうなボディは、無駄な贅ぜい肉にくが無く……、主に胸部にも……、その、なあ……？

「死ね！」

「うわあ!?」

　突とつ如じよＡ乃もの凄すごい鋭さを持ったパンチが、オレの顔面めがけて繰り出される。

　いやほんと、よく避けれたよ!?　突然なんなの!?

「……な、何すんだよおまえ！」

「あんたがあたしの胸を見ながら、軽量化……はぁ……とか呟つぶやいて溜ため息いき吐つくからでしょうが！」

「……え!?　エスパー!?」

「声に出てたわ!!　一機死ね！」

　さらにもう一撃繰り出される抉えぐるようなパンチが耳をかすれる。

　ちょ、マジでもう、手加か減げんする気ゼロじゃないですか！

　オレの人生はヒゲの親父と違ってライフ一機しかないんだよ……！

「……あ、あ、あの、あの……やめてくだ……さ、いぃぃ……」

　そんな俺たちの間に、小さな人ひと影かげが入ってくる。

　そこには、オロオロと心配そうな表情をした、Ｂビー香カがいた。

　Ａエー乃ノよりも小さな身長、Ａ乃よりも女性らしいフェイス、気弱だが、えへっと笑うとちらりと八や重え歯ばが覗のぞくのもポイントが高い。名前もそうなのだが、もうどこからどう見ても女子力満点といった印象のこいつは、しかしながら男子生徒だった。

　すぐに成長するから、と言われて買ったダボダボの制服を着ているのだが、明らかに袖の長さが長く、いわゆる萌もえ袖そでと言われる状態になっていた。

「……やっぱり女子としてはＡ乃の方が圧倒的に敗北の──」

「死ねえええええ!!」

「あぶし!?」

　いかんいかん、またしても思考が表にだだ漏れになっていたようだ。

　今回は脇腹にＡ乃のボディがヒットする。

　これはジワジワ効いてくるやつだ。

　というかＢビー香カはなんで顔を赤らめてるんだよ！　女子か！

「……相変わらずうるさいですね」

　教室の奥の方で読書をしていた女子生徒が、本を閉じてこちらに目を向ける。

　彼女の名前はＣシー奈ナ。真面目そうな眼鏡、パッツンの前髪など、どこをどうみても委員長キャラ！　もしくは秀才キャラ！　なのだが、実際のところはメチャメチャ学校の成績がいいというわけではなく、やたらマニアックな雑誌などを読んでいる、オタク系女子だ。

　身長はＢ香よりもさらに低く、オレなんかと並ぶとかなり小柄な女性だと言える。

　まあ、身長の方は小柄なのだが……胸部の、贅ぜい肉にくなんかは、かなりの？　ものを？　持っていらっしゃるとか？　いないと……。

「死ね!!　死んで一生コンティニューするな！」

「ひどいよぉ！」

「あぶし！　おうし!?」

　再三に渡ってのＡ乃の攻撃、そしてなぜかＢ香からも攻撃を受ける。

　ちょっと待っておかしくない!?

　そもそも人生に『コンティニュー』なんてある訳ないだろ……！　Ｂ級映画の続編じゃないんだから……!!

　そんな事言っている間にＣ奈はまた本を読むモードになってるからね!?

「あはは～Ｅイー記キは相変わらず、面白いなあ～（ポリポリ）」

後ろから間の抜けた声が聞こえてくる。

　スナック菓子をポリポリと食べながら笑っているのは、Ｄデイー介スケだった。

　長い髪の毛を軽く後ろで縛しばるようなヘアスタイルをしており、前髪はそれでも長く、目が見えない位くらいだった。表情が見えないからか、いつもボーッとしているような印象が強い。

　オレよりも高い身長を猫背で丸めて歩きながら、いつもお菓子を食べている。

　……前振りは長くなったが、これがいつも音楽室に集まるメンバーの５人だった。

　みんな高校二年生になったばかりである。

　音楽室に集まると言っても、俺たちは吹奏楽部でも軽音楽部でもない。

　ずばり！　映画研究会だ！

　……と言っても、実はほとんど廃部寸前の状態だったところを、オレが面白そう！　と彼らを巻き込んで復活させたばかりで、活動はしっかりとは出来ていないのだった。

「しかしこんな事ではいかん！」

「……ん？　何よいきなり？」

「うーん、やっぱり、映画研究会である以上、映画を撮らなければと思うんだよ！　というか、映画撮るの、面白そうじゃね!?」

「……俺は……もともと……映画撮りたくて……来てるよ？（ポリポリ）」

「Ｄデイー介スケはビデオカメラも持ってるしな！」

「…………ホラーなら、興味はあります。それとＰＣを使っての編集も」

「さすが、Ｃシー奈ナ！　あ、そう言ってこの間借りたホラーの映画怖かったぞ！」

「……ああ～オレも借りたけど、なんかオチがいまいちよく分かったような分かんなかったような？」

「シュレディンガーの猫のような思考実験に逃げたり、ラストシーンでいきなりキャラクターがぶれるくらいの説明口調でしゃべらせてるようじゃ、二流どころか、三流脚本家よね」

　Ｄ介とＣ奈が話を続ける中、Ａエー乃ノが話に割り込んできた。

「あたしは青春っぽい事出来るなら、なんだっていいよ？　映画制作だって、すっごい楽しそうだと思うし！」

「おお、Ｂビー香カは？」

「……ぼ、ボクは、あの、みんなが、やるなら、手伝う、よ……？」

　予想はしていたが、５人の意見はほぼ一致していた。

　さすがオレが見込んで集めた精鋭達である！

「それでオレは考えてきたんだ！　オレ、監督脚本演出プロデュー

サー！　お前達４人が出演、スタッフを担当する作品を……！　この作品を、夏までに作り上げよう！　まずは作品を作るということについて、どう思う？」

　オレはそう聞いてみんなを見回す。

「作品次第だけど……いいんじゃない？」

「……凄すごい……楽しみ……」

「……いいと思います」

「おっけ～」

　みんないつもと変わらないように見えるが、その期待感をひしひしと感じる。

「……じゃあ、お待ちかねの作品案だ……」

　オレはチョークを取り、黒板に大きく、その難しい漢字を書く。

「テーマは、オレ達で、新しい『都市伝説』を作ること……字じ面づらが少し大げさで、中ちゅう二に病びょうっぽさを発揮してた方がいいかなと思って、考えてきた！」

　夕焼けが照らす教室で、オレ達の、最期の夏が始まった……。

「──タイトルは、『終シユウ焉エンノ栞シオリ』だ」

あとがき

　初めましてから、「あらやだ！　大きくなっちゃって！　すごいかっこいいじゃない!?　将来はアイドルになれるんじゃないの？　今からサインもらっちゃおうかしら？（爆笑）」なんてテンションで話しちゃう引っ越しする前は隣の家に住んでたおばちゃんまで、おはようございます。こんにちは。こんばんは。どうも、スズムです。

　さてさて、『終焉ノ栞弐　報復-Re:vival-』を手に取っていただきありがとうございます。

　いかがでしたでしょうか？

　自分は、今作品を書くに当り前作の『終焉ノ栞（編集さんとは無印さんと呼んでます）』を何度も何度も読み返しました。

　初めてで分からないことだらけだった当時の気持ちを思い出しつつ、少しばかりのビハインドを感じることが多かったのですが、一つだけ後悔があります。

　はい、そうですあとがきです。

　あのあとがきの野郎は本当にいろいろ台無しにしてるなっと改めて思いました。あれを見てデミグラス？　学園を書かれているLast Note．さん（この後に誠心誠意の謝罪をいたしました）やその他の小説家さんが苦笑いしてるのかと思うと狭い場所に籠こもって絶叫しながらヘドバンしたくなります。

　実を言うとあのあとがきを書いている時のボクの体は、インフルエンザと戦っている真っ最中で体温は39度近くありました。

平熱が低いため39度なんて出ようものなら、動悸と寒気と吐き気と頭痛と腹痛と納期守れない痛が一斉に襲いかかってきます。

あとがきを書こうと思った所までは覚えているのですが、それからの記憶が曖あい昧まいです。

その中でドーナッツ程度を餌にあとがきを書かせた担当はすごいやつだなっと思います。

書いたはずの「担当者をＳＮＳで売り話題をもらう」の日付も大人の事情で勝手に消されてて更に寒いことになってましたし……あの似え非せヒゲ親父……覚えておけよ……。

くだらない言い訳も程々に、そろそろまとめに入りたいと思います。

今回のお話を最後まで読んだ方は、いろいろな疑問・不満等が残ったかと思います。

少なからずボクが皆様の立場でしたらきっと疑問も不満もたくさん持ちます。

『回収できなくなったからループモノに逃げたのか……！』なんてねー。

一つだけお伝えしたいことは、今までの謎を有う耶や無む耶やにして誤ご摩ま化かす気はありません。

次巻である参さん巻、そしてその続きをどうか、ご期待いただければ。

ただ勘違いしないでいただきたいのですが、回答者はボクではありません。

そう、今回の「キツネ」である貴方あなたが回答者です。

回答者……なんて突然言われても分かりづらいですね。

ですので、ここではあえて貴方の役職は『探偵』だとだけ載のせておきます。

　どうか、怒りで投げ出す前に、勇気を持った４人の子供達。そして、これから悲劇に沈んでゆく５人の子供達が精一杯出す『ヒント』を受け取ってください。

　夢オチよりも寒く、深く、不愉快なオチを貴方の為にご用意させていただきます。

　登場人物達は、顔も見えないインターネットのトーチカから手を出し槍やりで叩く貴方が大嫌いですので。

　意地悪のつもりでどうか暴あばいてください。

Ｐ．Ｓ

編集さんへ。

　無印さんのあとがき変えたいです。本当に変えたいです。

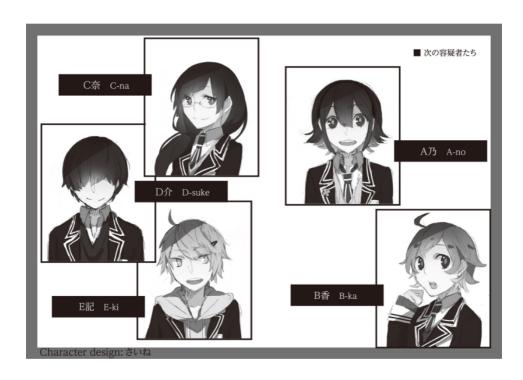
　ヒゲ親父でも、最近「しばらく転がり込まれてた元カレから離れる為に……」という残酷な理由で引っ越しをした巨乳を売りにしている殺さつ戮りく兵へい器きボインちゃん（※これはボクが呼んでいる訳ではなく、ヒゲ親父から聴きました。名前を出せないため致し方なく使用しております）でもいいので相談乗ってください。

　それでは、参巻「終シュウ焉エンノ栞シオリ参サン　終末-Re:write-」でお会いしましょう。

あとがき。
終焉ノ栞小説
2巻発売
ありがとう
ございます!!
1巻に引き続き、
キャラデザ、表紙、口絵
などやらせて頂いて
います。
あまり描く機会
がないですが、
私服のD音ちゃん
はかわいいと
思います。
さね

小説2巻、発売おめでとうございます！
今回も挿絵を描かせて頂きましたが、
あいかわらずA弥くんは描きづらいです。
でも今回、新キャラ5人新しく描いたんですけど
もっとかきづらい子が勢ぞろいしてて、A弥くんが天使に見えてきました。
B子ちゃんはかわらず天使ですね LOVE
今回は本当に恋するB子ちゃんがかわいいのでぜひ
これを機にB子ちゃんのファンがふえることを願ってます!!!（激プッシュ）

お祝いコメント
終焉ノ栞 小説第弐巻
発売おめでとうございます!!
スズムのひねくれた(いい意味で!)発想力には
毎回驚かされます。どのような結末を迎えるの
か気になって眠れず、寝不足になりました。
ので、早く続きを出しておくれっ…!!
(或いはコッソリ教えて…!!笑)
ぎぶそん
わんは
小説発売おめでとうございます!
今回も罠が仕掛けてある気がしてなりません
終焉ノ栞2発売
おめでとうございます!!

■ 次の容疑者たち
C奈　C-na
D介　D-suke
E記　E-ki
A乃　A-no
B香　B-ka
Character design: さいね

著者

スズム

「主人公の名前を決めてください」

「文字にほとんど絡んでないくせに主犯という名でやたら主張してくる音楽おじさん」

イラストレーター

さいね

色彩豊かなデザインセンスをもち、終焉ノ栞プロジェクトのキャラデザ等担当。

本プロジェクトの一番のしっかり者である。お酒好き。

イラストレーター

こみね

作画・動画制作等、「終焉ノ栞」のビジュアル周りを担当する絵師。

「終焉ノ栞」プロジェクトの一番の理解者。こむねじゃないよ。

主犯

文字にほとんど絡んでないくせに主犯という名でやたら主張してくる音楽おじさん（１５０Ｐ）（わんはーふぴー）

最近一番嬉しかったことは「行きつけのコンビニで女性店員さ

んが僕に向かっていらっしゃいませ！　って言ったり丁寧にレンジでお弁当を温めてくれたこと」らしいです。

　店員さんナイスガッツ。

カバー・口絵／さいね

カバー・本文イラスト／こみね

主犯／１５０Ｐ

装丁／團夢見

終シユウ焉エン ノ栞シオリ 弐ニ

報復-Re:vival-

スズム

2013年10月31日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

ＭＦ文庫Ｊ『終焉ノ栞 弐　報復-Re:vival-』

2013年10月25日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二

発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

https://www.kadokawa.co.jp/

メディアファクトリー　カスタマーサポート

［WEB］https://www.kadokawa.co.jp/

（「お問い合わせ」へお進みください）